

唐木戸第2遺跡

Karakido 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9

2005

宮崎県埋蔵文化財センター



道路遠景（西より）



道路全景

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した高鍋町所在の唐木戸第2遺跡は、平成14年度に発掘調査を行ったものです。調査によって縄文時代草創期～早期の土坑やアカホヤ降灰以降の溝、土坑、掘立柱建物、竪穴住居が検出され、当該期の石器や土器も出土しました。特に各時期の旧河川を生活に利用する痕跡が少なからず確認されたことは、調査の大きな成果といえるでしょう。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 宮園淳一

例 言

- 1 本書は、平成14年度に実施した東九州自動車道（都農～西部間）建設に係る唐木戸第2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団から委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した。
- 3 現地での実測等の記録は、主に吉富俊文、草薙良雄、加藤一学、金丸史絵が行ったほか発掘作業員が補助した。
- 4 本書使用の遺物実測図は、吉富が作成したほか整理作業員が補助した。
- 5 本書に使用した実測図等の墨書きは、吉富が行ったほか整理作業員が補助した。
- 6 現地での写真は、吉富、草薙、今堀屋義行が、出土遺物の写真は、吉富が今堀屋の協力を得て撮影した。
- 7 測量・空中写真・理化学的分析等は、次の機関に委託した。
地形測量、グリッド杭設定 : (有)エイユー技建
空中写真 : (株)スカイサーべイ九州
自然科学分析(植物珪酸体分析他) : (株)吉環境研究所
- 8 本書に使用した略記号は次のとおりである。
S A…堅穴住居 S B…掘立柱建物 S C…土坑、堅穴状遺構
S E…溝状遺構 S I…集石遺構
- 9 本書で使用した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の5万分の1図を基に、遺跡周辺地形図は日本道路公団作成の1000分の1図を基に作成した。
- 10 本書で用いた座標は海拔高であり、方位は座標北(G, N)を基本とし、位置図等の一部に磁北(M, N)を使用した。
- 11 国土座標は、平成13年度に設置された唐木戸第3遺跡発掘調査基準点「T-1」と「T-2」の国土座標を基に設置している。但し、改訂前の旧平面直角座標系II(日本測地系)である。
- 12 土器の色調及び土層については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準上色帖」に準拠した。
- 13 出土遺物の石材については、松田清孝氏(宮崎県総合博物館)と赤崎広志に同定をお願いした。
- 14 本書執筆は吉富、編集は吉富、金丸琴路が担当した。
- 15 出土遺物その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

- 遺構の計測箇所は、次の通りとする。
S A…平面上端・下端、断面 S C…平面上端・下端、断面
S E…平面上端・下端、ベルト土刷断面 S I…礎平面、断面
- 掘団の縮尺は次の通りとする。
遺物・遺構分布図…1/350、1/500 上層断面図…1/20～1/80
遺構実測図…1/30～1/60 石器実測図…2/3、1/2
土器実測図…1/3 鉄器実測図…1/2 銭貨実測図…2/3
※ 以上を基本とするが、これ以外のものもある。
- 石器觀察表の計測値は、次項の計測方法に従った。単位は、cm、gである。

- 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査の地層については、下記の統一呼称を用いる。
 M : 宮崎平野を意味する識別記号
 ML : ローム層 MB : 黒色土帶

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第Ⅲ章 調査の経過と方針	5
第1節 確認調査の概要	5
第2節 発掘調査の方法	5
第3節 整理作業及び報告書作成	8
第Ⅳ章 調査の記録	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本順序	9
第3節 縄文時代草創期～早期の調査	13
第4節 K-Ah降灰以降の調査	18
第Ⅴ章 自然科学分析	39
第Ⅵ章 まとめ	49

挿図目次

第1図 府木戸第2遺跡と周辺遺跡図	3
第2図 周辺地形及び調査区	4
第3図 各調査面の範囲	5
第4図 確認トレンチ配置図	6
第5図 グリッド配置図	6
第6図 土層実測ポイント配置図	10
第7図 A・B区（東西方向）土層図	11
第8図 C区（北側壁面）土層図	11
第9図 B区K-Ah降灰以前の土層図	11
第10図 縄文時代草創期～早期遺構・遺物分布状況図	13
第11図 縄文時代草創期～早期石器・剥片実測図	14
第12図 縄文時代草創期～早期堆集中核所実測図	14
第13図 縄文時代草創期～早期土坑実測図	15
第14図 S C 8におけるリン・カルシウム含量検出結果	16
第15図 K-Ah降灰以降遺構分布状況図	17
第16図 K-Ah降灰以降S A 1実測図	18
第17図 K-Ah降灰以降S B 1・2実測図	19
第18図 K-Ah降灰以降S B 3実測図	20
第19図 K-Ah降灰以降S B 4実測図	21
第20図 K-Ah降灰以降S B 5実測図	22
第21図 K-Ah降灰以降S C 9実測図	23
第22図 S C 9出土遺物実測図	23
第23図 K-Ah降灰以降S C 1実測図	25
第24図 K-Ah降灰以降S C 2～6実測図	26

第25図	S E 2・3・9上層断面図	27
第26図	溝状遺構出土遺物実測図	27
第27図	C区溝状遺構分布状況図；最下層	28
第28図	C区溝状遺構分布状況図；下層	28
第29図	C区溝状遺構分布状況図；上層	28
第30図	S E 10～13土層断面図	29
第31図	C区東壁面上層断面図1	33
第32図	C区東壁面上層断面図2	33
第33図	C区南壁面上層断面図	33
第34図	S E 6 土層断面図	34
第35図	C区ベルト上層断面図	34
第36図	溝状遺構出土遺物実測図	35
第37図	遺構外出土遺物実測図	37
第38図	S E 6 における植物珪酸体分析結果	43
第39図	S E 7・8・15、S C 8・9に おける植物珪酸体分析結果	43
第40図	S E 6・7・8・15における花粉 ダイアグラム	46

表 目 次

第1表	縄文時代草創期～早期出土石器観察表	14
第2表	S C 8 における植物珪酸体分析結果	16
第3表	S C 8 における蛍光X線分析結果	16
第4表	S C 9 における植物珪酸体分析結果	24
第5表	S E 6・7・8・15における植物 珪酸体分析結果	32
第6表	S E 6・7・8・15における花粉 分析結果	32
第7表	S E 6・7・8・15における珪藻 分析結果	32
第8表	K-Ah降灰以降出土土器観察表	38
第9表	K-Ah降灰以降出土石器観察表	38
第10表	S C 9 と S E 6 における放射性炭素 年代測定の試料と方法	39

第11表	S C 9 と S E 6 における放射性炭素 年代測定結果	39
第12表	S E 6・7・8・15、S C 8・9に おける植物珪酸体分析結果	42
第13表	S E 6・7・8・15における花粉 分析結果	45
第14表	S E 6・7・8・15における珪藻 分析結果	47

図版目次

卷頭図版	遺跡遠景（西より）	
	遺跡全景	
図版1	遺跡遠景（東より）	51
	調査B・C区全貌	51
図版2	掘立柱建物群	52
	S C 7・8	52
図版3	S 11	53
	S C 8 上層断面	53
	S A 1	53
	S B 1	58
	S B 2	53
	S B 3・4	53
図版4	S C 9	54
	S C 1	54
	S E 4・5（南より）	54
	S E 7（南より）	54
	S E 14・15（北より）	54
	S E 6 上層断面（北より）	54
図版5	縄文時代草創期～早期出土石器	55
	土坑・溝状遺構出土土器	55
	溝状遺構出土石器・鉄鏃	55
	溝状遺構出土土器	55
図版6	溝状遺構出土土器	56
	溝状遺構出土石器	56
	遺構外出土土器	56
	K-Ah降灰以降出土須恵器・陶磁器	56

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(都農～西都間)は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となっている。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、宮崎県埋蔵文化財センターでは、平成6年度にこの区間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成11年度より宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

児湯郡高鍋町大字上江字北唐木戸周辺には、高鍋町による遺跡詳細分布図に記載されている牛牧原遺跡、北牛牧第1～5遺跡など多数の遺跡が存在している。工事区内がこれに隣接するということで、平成14年3月に確認調査を実施し、土坑3基、遺物等が認められた。これを受けて平成14年9月2日から平成15年3月7日にかけて本調査を実施した。整理作業は平成15年5月から実施し、平成16年7月に終了した。

第2節 調査の組織

唐木戸第2遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野 勝 (平成13年度)
	米良 弘康 (平成14・15年度)
	宮園 淳一 (平成16年度)
副所長兼秘務課長	菊地 茂仁 (平成13年度)
副所長兼秘務課長	大瀬 和博 (平成14～16年度)
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫 (平成13～16年度)
秘務係長	龜井 雅子 (平成13年度)
	野邊 文博 (平成14年度)
主幹兼秘務係長	石川 忠史 (平成15・16年度)

調査第一課長

而高 哲郎 (平成13年度)

児玉 章剛 (平成14・15年度)

高山 富雄 (平成16年度)

調査第一係長

谷口 武範 (平成13～16年度)

主幹兼調査第二係長

長津 宗重 (平成13～16年度)

主査 (確認調査担当)

戸高 幸作 (平成13年度)

横田 通久 (平成13年度)

主査 (調査担当)

草薙 良雄 (平成14年度)

主任主事 (調査担当)

加藤 学 (平成14年度)

調査員 (調査担当)

金丸 史絵 (平成14年度)

主査 (調査・報告書担当)

吉富 俊文 (平成14～16年度)

調査指導

小畠 弘己 (熊本大学)

泉 拓良 (京都大学)

本田 道輝 (鹿児島大学)

田崎 博之 (愛媛大学)

柳沢 一男 (宮崎大学)

広瀬 和雄 (国立歴史民俗博物館)

岡田 康博 (文化庁)

加藤 真二 (文化庁)

福宜田佳男 (文化庁)

第Ⅱ章 遺跡の環境

唐木戸第2遺跡の位置する高鍋町は、日向灘に面した宮崎県沿岸部の中央に位置し、宮崎平野の北側に位置する。町の北に小丸川、南に宮田川がそれぞれ東流し、最下流に現在町の市街地となっている沖積平野を形成している。また、町の西方は茶臼原台地、牛牧原台地、北方は川原原台地、南方は水谷原台地と、洪積台地が広がり冲積地を取り囲む形となっている。これらの台地上は、緩やかな起伏をもつ平地が広がり、畠地と集落が展開する。

唐木戸第2遺跡は、牛牧原台地上の北部縁辺から内部へ約500m付近、兒湯郡高鍋町大字上江字北唐木戸に位置する。本遺跡の所在する牛牧原台地は、高鍋町を含む宮崎平野中北部の段丘群中の三財原面に相当する。三財原面は、標高80~90mで上位面の茶臼原面とは海浸食で境をなす。

高鍋町には、新世代第四紀洪積世に形成された河岸・海岸段丘が広がる。これらの段丘は現在複雑に開析されており、いくつもの谷や低地があり込む地形である。こうした段丘面は、旧石器時代から人々の生活の場となっており、多くの遺跡が点在する。

字名の唐木戸の木戸は柵戸、城戸とも書き「門」の意味をもつ。周辺北側に牛牧という地名の地区があり、江戸時代軍馬の牧場があったとされ、南側の中尾橋を渡った辺りにも市之山牧場があったとされる。その牧場の木戸があった可能性もある。「高鍋藩史話」には、傳家（からや）郷は木城村たることとあり、高鍋町大字上江にカラケド（韓街道）という地名があると述べている。また「日向国史」によると川原町にある唐瀬・唐瀬原の地名は、この韓家の転訛ではないかと述べていることからも、韓街道も韓家の転訛の可能性があると考えられる。

本書で報告する唐木戸第2遺跡における今回の調査においては、弥生時代、中世の遺構・遺物が確認されているので、当遺跡周辺の遺跡分布状況について概観したい。弥生時代では、同町内に牛牧原遺跡、持田中尾遺跡がある。牛牧原遺跡では竪穴住居が7軒、中には花弁型の住居が検出されている。持田中尾遺跡では竪穴住居が2軒、土坑6基、溝状遺構等

が検出されている。どちらの遺跡においても、多量の舞目突帯文土器や大陸系磨製石器等が出土している。

東九州自動車道に係わる周辺の調査遺跡としては、北牛牧第5遺跡、唐木戸第1・3・4遺跡がある。北牛牧第5遺跡では、アカホヤ降灰以降の掘立柱建物1棟と土坑3基、溝状遺構が検出され、唐木戸第1遺跡では、中世の掘立柱建物4棟と土坑1基、溝状遺構が検出されている。

引用参考文献

「高鍋町史」	
高鍋町史編纂委員会	1987
「高鍋藩史話」	
安井尚義	1968
「日向国史」	
吉田貞吉	1929
「高鍋町遺跡詳細分布調査報告書」	
高鍋町教育委員会	1989
「相田中尾遺跡発掘調査概要報告書」	
高鍋町教育委員会	1982
「豪造市遺跡発掘調査報告書」	
高鍋町教育委員会	1986
高鍋町文化財調査報告書 第5集	
「大河ノ口第2遺跡」	
高鍋町教育委員会	1991
高鍋町文化財調査報告書 第7集	
「中尾・牛牧地区遺跡」	
高鍋町教育委員会	1995
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第80集	
「北牛牧第5遺跡・銀座第3A遺跡」	
宮崎県埋蔵文化財センター	2003



1 唐木川第2道路	2 唐木川第1道路	3 井戸道路	4 北牛牧第5道路
5 北牛牧第1道路	6 牧田中尾道路	7 唐木川第3道路	8 唐木川第4道路
9 大坪口第2道路	10 東谷原道路	11 雪南山道路	12 菅道所道路

第1図 唐木川第2道路と周辺道路図 (S = 1/25,000)



第2図 周辺地形及び調査区 (S = 1/3,000)

第III章 調査の経過

第1節 確認調査の概要

確認調査は、唐木戸第1遺跡の確認調査と同時期に連続して実施され、調査対象面積5,600m²のうちの東側3,300m²に対して行われた。これは、唐木戸第3遺跡発掘調査の事務所・作業員休憩棟及び駐車場等として、西側2,200m²を使用していたためである。

この確認調査で21か所のトレンチ（480m²）を入れた。調査区西側（T 16・17・20）において、鬼界アカホヤ（K-Ah）の良好な状態での残存を確認できた。また、始良Tn（A T）はほとんど風化しており、その下層においては砂礫層であった。調査区南側（T 10・11）も西側と同じようにK-Ahが確認でき、層として非常に厚く（約50cm）堆積していた。調査区の北側（T 4・8・9）はほとんど削平されており、K-Ahは残存せず、下層の黒褐色層（MB 0）・暗褐色層（ML 1）に少量の砂礫・礫が混在し、その下は砂礫層になっている。調査区東側（T 1・2・3）も北側と同じようにK-Ahは残存せず、MB 0も確認できなかった。その下のML 1・小林軽石を含む褐色層に多量の礫を含んでいた。ここでは、A Tの風化層まで確認できた。調査の結果、東側はかなり水の影響を受けており、土層も一定せず早い段階で砂礫層を確認した。調査区全体で遺物は確認できなかったが、西側を中心に土坑3基が検出された。

末調査の西側2,200m²の確認調査では、8か所のトレンチ（140m²）を入れた。全体にK-Ahの残存を確認できたが、層の厚みにかなり差があった。A T風化層及びブラックバンドまで確認できた。調査の結果、西側で遺物は出土しなかったが、土坑1基、溝状遺構2条、小穴群が検出された。

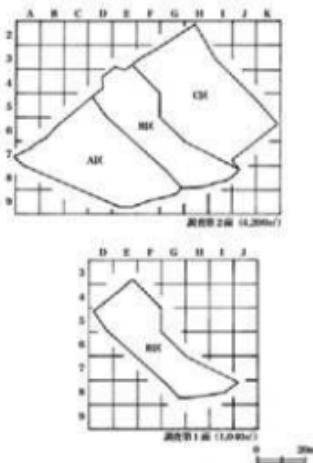
確認調査の結果から、調査区全面において本調査を実施することとなった。一次の確認調査は、平成14年3月11日に着手し、平成14年3月22日に終了した。二次は平成14年8月23日を行った。

第2節 発掘調査の方法

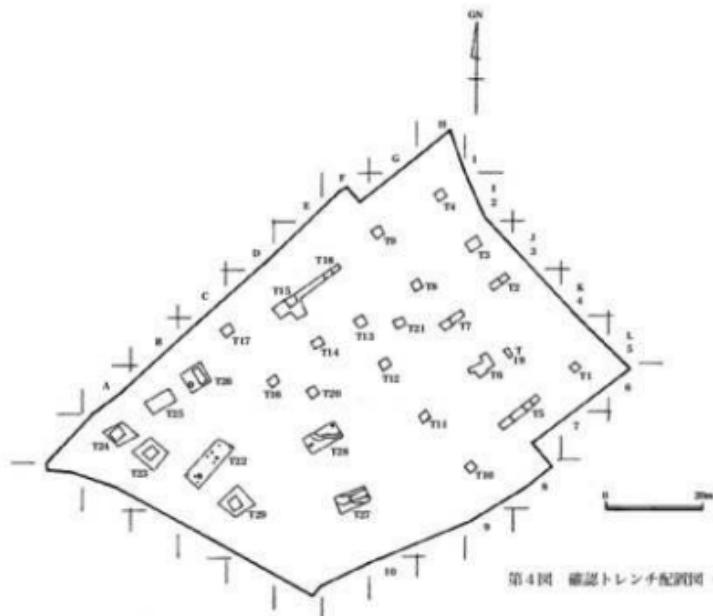
本調査対象面積は4,200m²で、調査の便宜上、南北から北東へ傾斜しているので南北側からA区、B区、C区を設定した。A区は町道に面し、C区は水路に面し、B区もまた、盛土による民家が隣接しており、全区とも境界より3m程度間隔を置いて調査することとした。グリッドは、国土座標にあわせて10mのグリッドを東西方向に西からA～K、南北方向を北から1～10に区分して設定し（第5図）、さらにそれを4等分した小グリッドに基づいて調査を行った。

調査に先立って行った確認調査の結果を受けて、K-Ah層を境としてK-Ah火山灰層上面、K-Ah火山灰層下を中心とした調査となった。

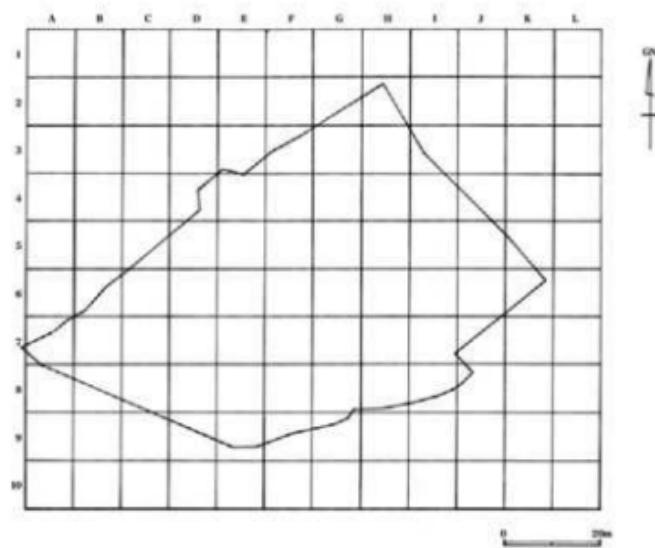
調査の経過については、日誌抄をもってかえる。



第3図 各調査面の範囲 (S = 1/2,000)



第4図 確認トレンチ配図 ($S = 1/1,000$)



第5図 グリッド配図 ($S = 1/1,000$)

1 平成13年度 確認調査

○3月11日～3月22日

表土剥ぎ、トレンチ設定（T1～T21）、トレンチ掘り下げ、トレンチ内精査、土層断面実測、写真撮影、埋め戻し

2 平成14年度 確認調査

○8月23日

調査区西側（唐木戸第1遺跡進入路、唐木戸第3遺跡事務所・作業員体憩棟及び駐車場等の跡地）の確認調査

表土剥ぎ、トレンチ設定（T22～T30）、トレンチ掘り下げ、トレンチ内精査、土層断面実測、写真撮影、埋め戻し

3 平成14年度 本調査

○9月9日～9月26日

旧地権者の残地への進入路造成

器材搬入、事務所等設置、表土剥ぎ、排水搬出（唐木戸第3遺跡へ搬出）

測量会社によるグリッド杭打ち

Ⅲ層(K-Ah) 上面の精査

Ⅲ層(K-Ah) 上面の遺構（S E 1～3、S C 1～

4、S C 9）検出状況写真撮影、掘り下げ

先行トレンチ掘削

K-Ah火山灰層の残存範囲の確認

○10月1日～10月30日

Ⅲ層(K-Ah) 上面の遺構

小穴群の平板測量実測並びに確認、掘立柱建物の検出

S B 1～5、S C 1～4、S C 9 土層断面・遺物出土状況写真撮影、掘り下げ、実測、遺物取り上げ

調査区中央の窪地の表土剥ぎ、掘り下げ

S E 2・3 のベルト土層断面写真撮影、実測

S E 1～3 の完掘写真撮影（中判）

基本土層確認用トレンチ掘削、土層断面写真撮影
不明土坑掘り下げ

窪地の遺物取り上げ

窪地内の遺構（S E 4～6）の掘り下げ

A・B区のラジコンヘリによる空中写真撮影

現地説明会準備、竹を用いて掘立柱建物の骨組復元

○11月5日～11月28日

現地説明会（11月6日）開催、参加者61名

排土運搬及び表土剥ぎ

B区の無道物剔除、V層上面精査

S C 1 の完掘写真撮影、埋め戻し

S C 9 の完掘写真撮影

C区の精査及びB区のグリッド杭打ち

C区の黒色土上面の遺構（S E 10～13、S C 5・6）の検出状況写真撮影、掘り下げ

C区の先行トレンチ掘削

S C 5・6 の上層断面写真撮影、実測、完掘

B区V層上面のコンタ実測

B・C区の遺物取り上げ

確認調査での連結土坑（T10）の検出状況写真撮影、掘り下げ

○12月2日～12月26日

確認調査での連結土坑（T10）の掘り下げ及び土坑（T15・T18）の検出

C区北側トレンチの土層断面実測

S E 3・5・9～13の実測、掘り下げ

B区のV層掘り下げ

C区南側のトレンチ掘削

C区全体の写真撮影（S E 10～13の完掘写真）

C区の黒色土掘り下げ

C区のS A 1 の検出状況写真撮影、掘り下げ

B区の先行トレンチの土層断面実測、埋め戻し

S E 3・5・9 の写真撮影

○1月7日～1月31日

C区の黒色土掘り下げ

B・C区の遺物取り上げ

排土の移動及び深掘トレンチの掘削、土層実測

B区のV層掘り下げ

B区V層上面の礫集中箇所の検出状況写真撮影、実測

C区黒色土層の遺構（S E 4～8・14・15）の掘り下げ

S E 14・15の実測、遺物出土状況写真撮影

B区のS C 7・8 の検出状況写真撮影・実測、半蔵、土層断面写真撮影・実測

○2月3日～2月27日

B区のS C 7・8の完掘、写真撮影

B区のV～VI層掘り下げ

C区黒色土層の遺構（S E 4～8・14・15）の掘り下げ

S E 15の遺物取り上げ、ベルトの土層断面写真撮影・実測

S E 4～8の掘り下げ、遺物取り上げ、ベルトの土層断面写真撮影・実測

C区のラジコンヘリによる空中写真撮影

C区のベルト及び壁面の土層断面写真撮影、実測

C区のコンタ実測

器材搬出、事務所等撤去

○3月3日～3月7日

重機による無道物層(K-Ah)除去

埋め戻し及び填圧

第3節 整理作業及び報告書作成

整理作業は、発掘調査終了後、県埋蔵文化財センターに持ち帰って始めた。調査での出土遺物の数が極めて少なかったために、調査員が水洗いを行った。その後、平成15年5月6日から7月10日まで、整理作業員による注記、土器接合、石膏入れ、実測、拓本を行った。整理作業にあたっては、調査員が遺跡の全体図を見せながら、包含層の状況、遺構の時期や位置関係、遺物の取り上げ状況等、調査の概要について整理作業員に説明を行った。

平成16年6月1日から7月29日まで整理作業員による実測、トレースを行った。調査員は遺物整理作業と並行しながら報告書執筆を行った。



作業風景



現地説明会

第IV章 調査の記録

第1節 調査の概要

本遺跡では調査の結果、縄文時代草創期～早期からK-Ah降灰以降の各時代において、下表に示すような遺構・遺物が検出された。

縄文時代草創期～早期（ML 1～MB 0中位）においては、確認調査の結果からB区のみの調査となつた。検出された遺構は、縄集中廻所1箇所と土坑2基（SC 7・8）である。土坑は、2基とも陥し穴状遺構である。検出面はいずれもML 1上面であるものの、土坑埋土や検出状況から、上位層のMB 0から掘り込まれた可能性が高いと判断した。また、ML 1～MB 0中位で石礫や調片が数点出土した。

K-Ah降灰以降では、竪穴住居1軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物5棟、土坑8基、溝状遺構17条が検出された。住居や掘立柱建物の埋土中からの出土遺物は極めて少なく、時期・性格を特定できなかつた。溝状遺構は、幾重にも切り合つて検出された。

時代	遺構	遺物
縄文時代 草創期～ 早期	縄集中廻所1箇所 土坑2基（いずれ も陥し穴の可能 性あり）	石礫 調片
K-Ah降灰 以降	竪穴住居1軒 竪穴状遺構1基 掘立柱建物5棟 土坑8基 溝状遺構17条	弥生土器 上師器 須恵器 石礫 調片 鉄鏃 鉄貨（寛永通寶）

第2節 基本層序

唐木戸第2遺跡は、南西部のA区から北東部のC区にかけて緩やかに傾斜している。C区は北西から南東に向かう浅い谷状になつていて、全体で黒色土が厚く堆積し、K-Ahが残存していない。A区両側は、人家があつたところで削平を受けており、K-Ahが残存していなかつた。

本遺跡の基本層序は、小林鉱石を含む褐色土層

（VIb層）まで比較的良好に自然堆積しているB区南部の先行トレンチの土層をもとにし、K-Ahが残存していたA・B区の北側にトレンチを設定し、このVIb層から下の土層を確認した。基本層序は以下に示すとおりである。

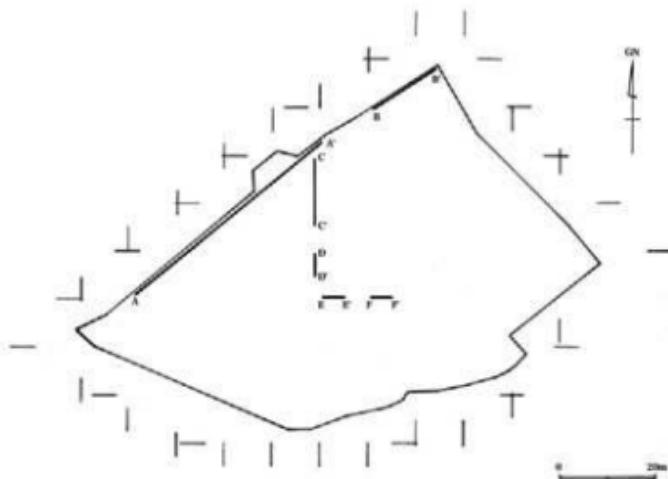
- Ia層： 表土
Ib層： 客土（擾乱土）
II層： 黒色土
軟質でしまりがなく、粘性もない。
III層： アカホヤ火山灰（K-Ah）
黄褐色の火山ガラスを多量に含む。
下位に火山豆石を含む。
IV層： 黒褐色土（MB 0）
固くしまつていて、粘性はない。
V層： 暗褐色土層（ML 1）
固くしまつていて、粘性はない。
VIa層： 褐色土
しまつていて粘性はある。
VIb層： 褐色土（Kr-Kb）
やわらかく粘性がある。小林鉱石を多量に含む。
VIc層： 褐色土
しまりはなく、粘性がある。
VII層： 暗褐色土（MB 1）
固くしまつていて、暗褐色のクラックを含む。橙色・褐色粒が粗に入る。
VIIIa層： 明褐色土（ML 2）
ねばねばして粘性がある。
VIIIb層： 明黄褐色土（AT）
ATの粒子を密に含む。AT下位にある白色粒が層内上下に散在する。水成堆積の可能性あり。
IX層： 砂礫層

唐木戸第2遺跡の基本層序

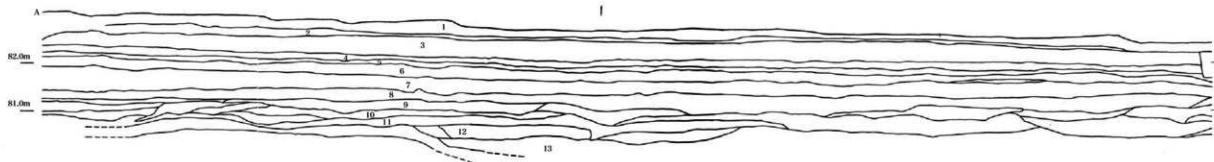
	層名
I a	表土
I b	客土 (擾乱土)
II	黒色土
III	アカホヤ火山灰 (K-Ah)
IV	黒褐色土
V	暗褐色土
VI a	褐色土
VI b	褐色土 (小形軽石 (Kr-Kh) を多量に含む)
VI c	褐色土
VII	暗褐色土
VIII a	明褐色土
VIII b	明黄褐色土 (A-T)
IX	砂礫層

東西トレンチの上層 (A'-A)

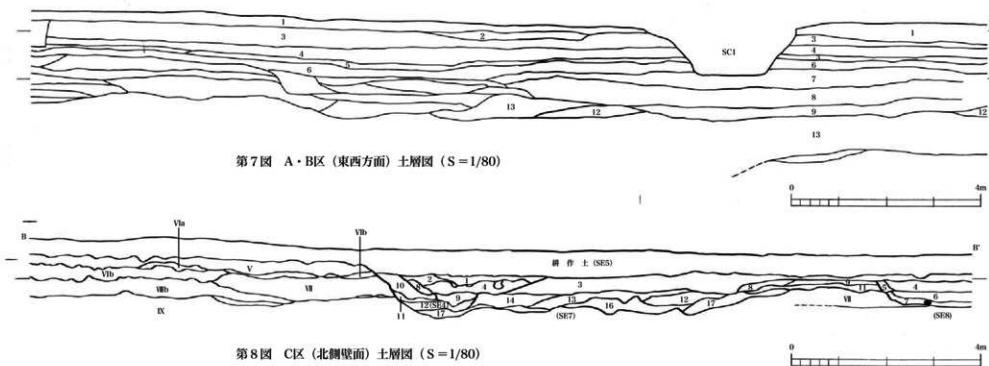
東側	層名	西側	層名
I a (表土)	I a (表土)		
II (黒色土)	II (黒色土)		
III (K-Ah)	III (K-Ah)		
IV (MB 0)	IV (MB 0)		
V (ML 1)	V (ML 1)		
VI a	VI a		
間層 (褐色土)	VI b (Kr-Kb)		
VI c	VI c		
間層 (暗褐色土)	間層 (褐色土)		
VIII b (A-T)	VIII a (明黃褐色土)		
間層 (黃褐色土)	VIII b (A-T)		
IX	IX		



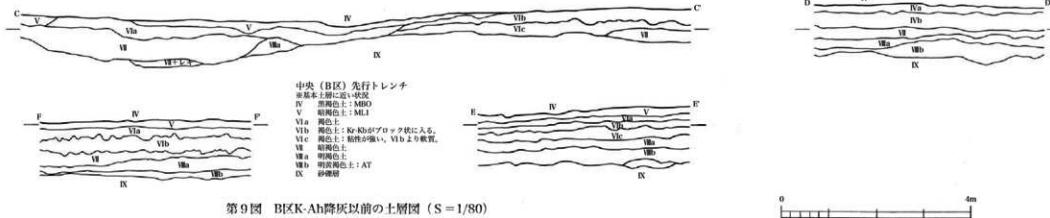
第6図 土解剖測点配置図 (S = 1/1,000)



第7図 A・B区（東西方面）土層図（S=1/80）



第8図 C区（北側壁面）土層図 ($S = 1/80$)



第9図 BIJK-Ah降灰以前の土層図 (S=1/80)

(AA') 土層実測トレンチ

西蜀

化學性地北面 (酸性)

第3節 縄文時代草創期～早期の調査

基本層序のIV層～VI層上面の調査では、縄集中箇所1か所・土坑2基を検出し、打製石器2点と調片2点が出土した。石器(第11図2)は緑色凝灰岩製で表面の風化が激しく、リング・フィッシャーが確認できなかった。土器は出土していない。

1 縄集中箇所 (第12図)

B区中央の南よりのF6グリッドに位置する。M B0層(IV層)から検出された。およそ4.0m×2.5mの範囲内に分布し、総数22個、赤化縄は含まれていない。10cm程度の縄がほとんどで、石材は砂岩である。掘り込みも敷石も持たず、炭化物は検出されなかった。

2 土坑

S C 7 (第13図上)

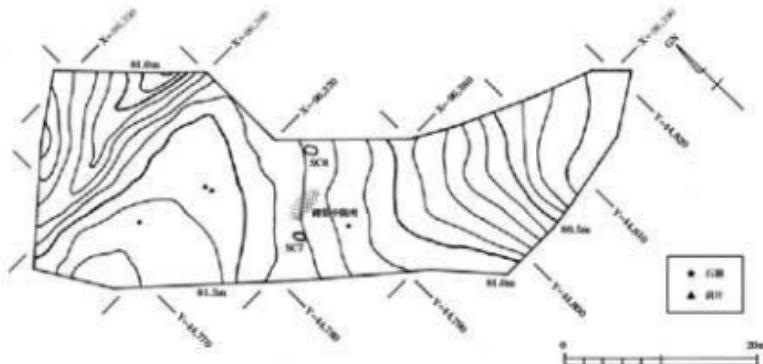
B区中央の南よりのF6グリッドで検出された。検出面はV層上面である。梢円形で長径が1.3m、短径は0.75m。検出面から底面までの深さは、1.1m程度である。埋土の堆積状況や長軸方向の断面な

どから陥穴の可能性がある。遺物を作わず、炭化物も検出されなかった。

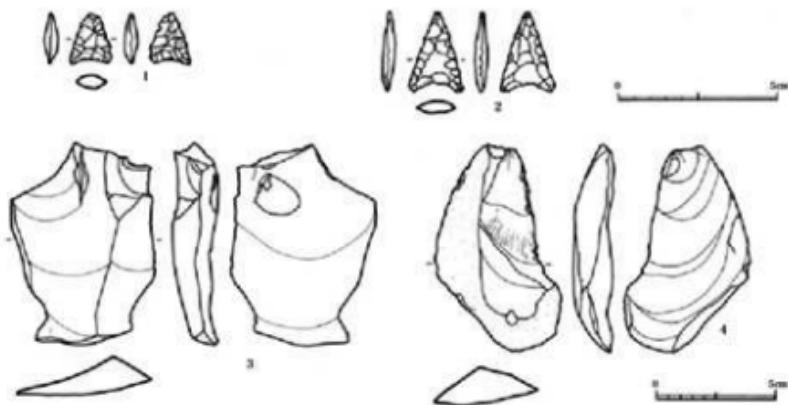
S C 8 (第13図下)

B区中央の北よりのG6グリッドで検出された。検出面はV層上面である。梢円形で長径が1.4m、短径は1.1m、検出面から底面までの深さは2.5m程度である。埋土の堆積状況や長軸方向の断面などから陥穴の可能性がある。遺物を作わず、炭化物も検出されなかった。

S C 8については、埋土上部と埋土底部から試料を採取して植物桂酸体分析を行った(第V章3)。その結果、S C 8の埋土の堆積当時は、クマザサ属(ミヤコザサ節を含む)を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族、ネザサ節なども生育するイネ科植生であったと考えられる(第2表)。S C 8はK-Ah残存エリアの縁辺部で、C区の谷部に接していることからヨシ属などが生育する湿地的なところがC区に存在したと推定される。



第10図 縄文時代草創期～早期構造・遺物分布状況図 (S=1/500)



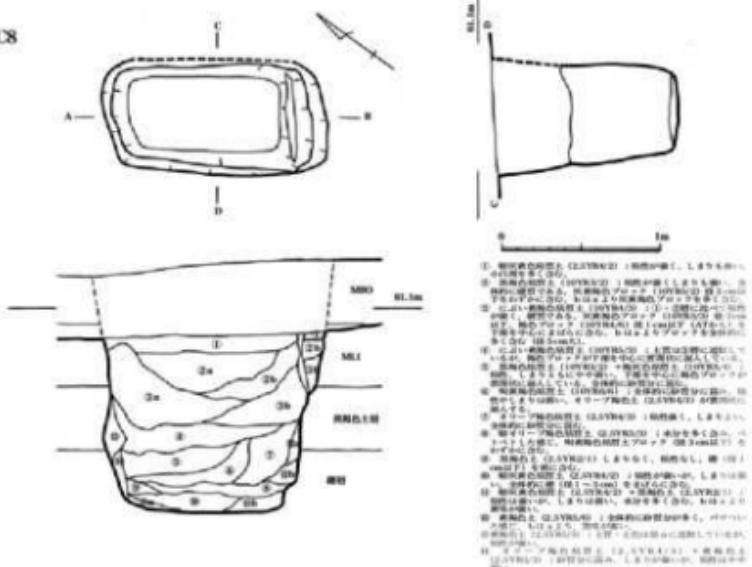
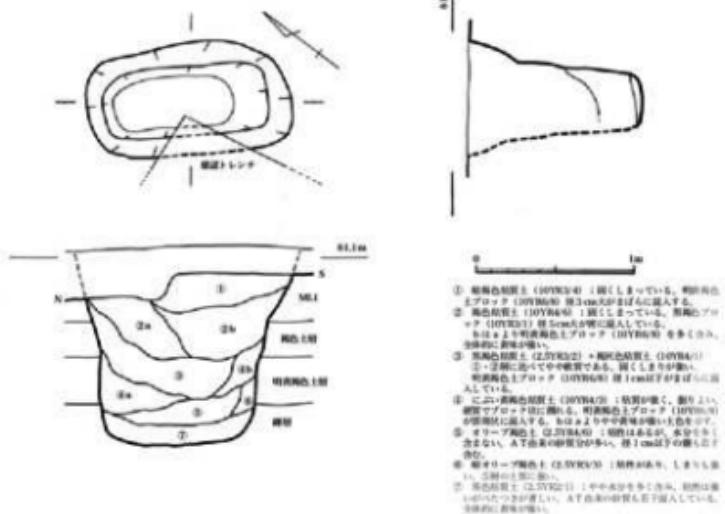
第11図 縄文時代草創期～早期出土石器・剥片実測図 (S = 2/3, S = 1/2)

番号	正式記号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	X座標	Y座標	レベル(m)
1	276	E5	石頭	淡灰岩	1.6	1.3	0.42	0.6	-96363.276	44772.834	81.485
2	127	F7	石頭	緑色板状灰岩	2.5	1.75	0.4	1.2	-96381.881	44789.159	81.125
3	130	F5	剥片	頁岩	8.4	6	0.6	66.3	-96368.477	44781.550	81.134
4	129	E5	剥片	頁岩	8.65	5.3	1.7	59.5	-96365.730	44773.314	81.329

第1表 縄文時代草創期～早期出土石器概要表



第12図 縄文時代草創期～早期集石造構実測図 (S = 1/40)



第13図 縄文時代草創期～早期土坑灰陶器 (S=1/30)

また、SC8については、埋土上部と下部から採取された2点および比較試料として採取された2点(遺構外・地山層)の計4点で、土壤理化学分析を実施した。

その結果、SC8の埋土におけるリン酸含量は、埋土の上部と底部が地山層と比較して明らかに高い値である(第3表、第14図)。このことにより、S-

C8の内部には何らかの生物遺体が存在していた可能性が示唆されるが、埋土上部の方が埋土底部よりもリン酸含量が高いことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。カルシウム含量は、遺構埋土と比較試料との間に明瞭な差異は認められない。カルシウムについては、土壤中で拡散・移動した可能性が考えられる。

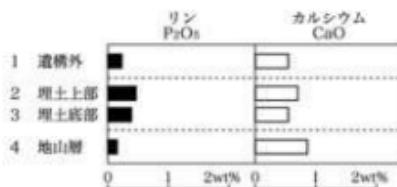
検出密度 (mg/g > 1000mg/g)	試料	イネ科				タケ科				その他のイネ科			
		キビ属	ヨシ属	エスキモ属	タケ属	タケ科	メダカ属	タケ属	タケ科	ヒツバク属	未分類	根状茎属	未分類
SC8	1(埋土上部)	35	7	7	41		14	7	97	194	131	69	470
	2(埋土下部)	7	7	34	48			7	102	164	48	164	464

第2表 SC8における植物性酸体分析結果

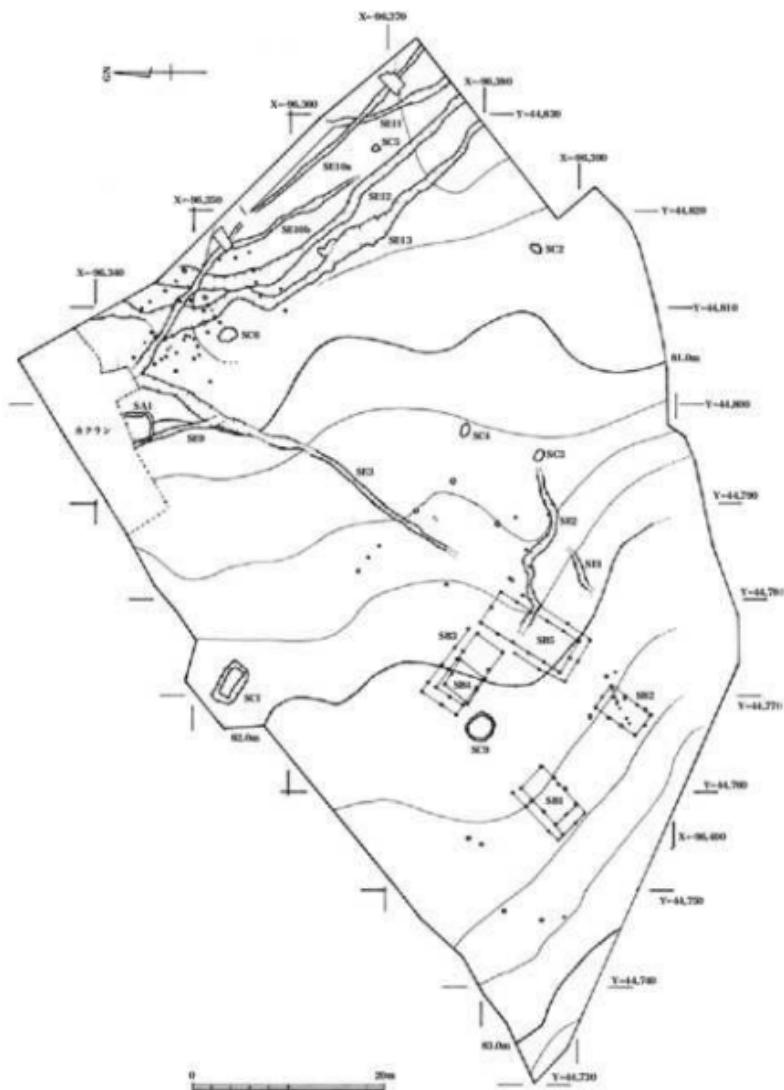
単位: wt (%)

地点・試料 原子No.	化学式	SC8			
		1	2	3	4
12	MgO	0.30	0.18	0.10	0.05
13	Al ₂ O ₃	32.64	33.50	31.63	28.89
14	SiO ₂	49.40	48.45	51.85	46.87
15	Fe ₂ O ₃	0.27	0.48	0.39	0.15
16	SO ₃	0.56	1.05	0.37	0.18
19	K ₂ O	1.71	1.38	1.69	1.33
20	CaO	0.55	0.71	0.54	0.85
22	TiO ₂	1.26	1.24	1.43	1.84
23	V ₂ O ₅	0.04	0.07	0.05	0.08
25	MnO	0.31	0.35	0.16	0.56
26	Fe ₂ O ₃	12.87	12.55	11.74	19.16
35	Br	0.03			
40	ZrO ₂	0.05	0.04	0.05	0.04

第3表 SC8における蛍光X線分析結果



第14図 SC8におけるリン・カルシウム含量検出結果



第15図 K-Ah頁岩以降鉱物分布状況図 (S = 1/500)

第4節 K-Ah降灰以降の調査

1) 壁穴住居

S A 1 (第16図)

C区北側のG 3 グリッドで検出された。後世の上坑のために搅乱され、北側半分が削平されていた。検出された住居の形状は、長辺が3.7m以上、短辺が2.9mの開丸長方形プランである。長軸の方位は、N 5° Wである。柱穴は直径6cm～14cm、深さ3cm～10cmのものが5箇所 (P 1～P 5) 確認され、長軸側は周壁から10cm、短軸側は50cm内に入ったところに位置する。P 6は補助的な柱の柱穴と考えられる。検出面から床面の深さは最深部が17cmを測る。埋土は、上層が硬質でオリーブ褐色粒を粗に含む黒色土で、下層がオリーブ褐色粒と橙色粒を含む暗オリーブ褐色土である。遺物は出土していない。住居西側の土刷は、S E 9により切られていた。

2) 剥立柱建物

S B 1 (第17図)

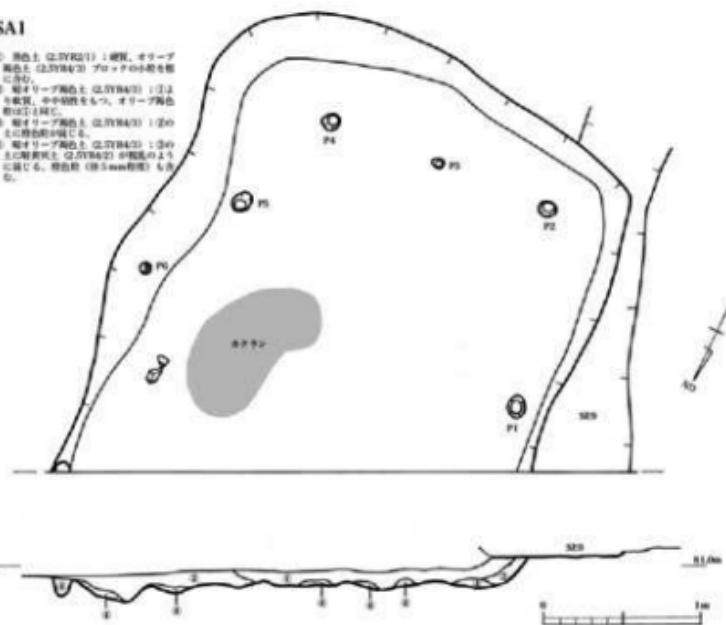
A区西側のC 7 グリッドで検出された。梁行2間 (1.5～1.6m)、桁行3間 (1.8～2.0m)、面積が約17.3m²を測る。柱穴は径約10cm～30cm、深さは8cm～30cmを測る。棟方向はN 45° Eをとる。北西と南西の2面に庇をもち、北西側が桁行6.8mで梁は0.9m、南西側が桁行3.9mで梁が1.2mを測る。柱穴の埋土は若干粘性を帯びる黒色土で、K-Ah粒がブロック状に混じる。柱底 (直径約14cm) と思われる埋土をもつ柱穴が2箇所 (P 4、P 8) あった。遺物は出土していない。

S B 2 (第17図)

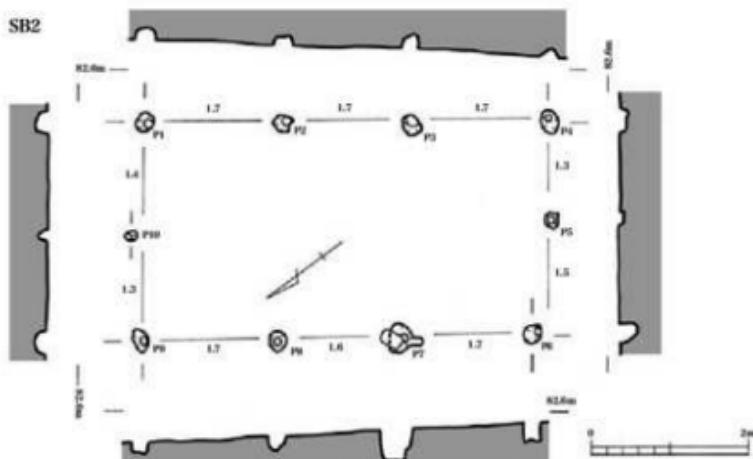
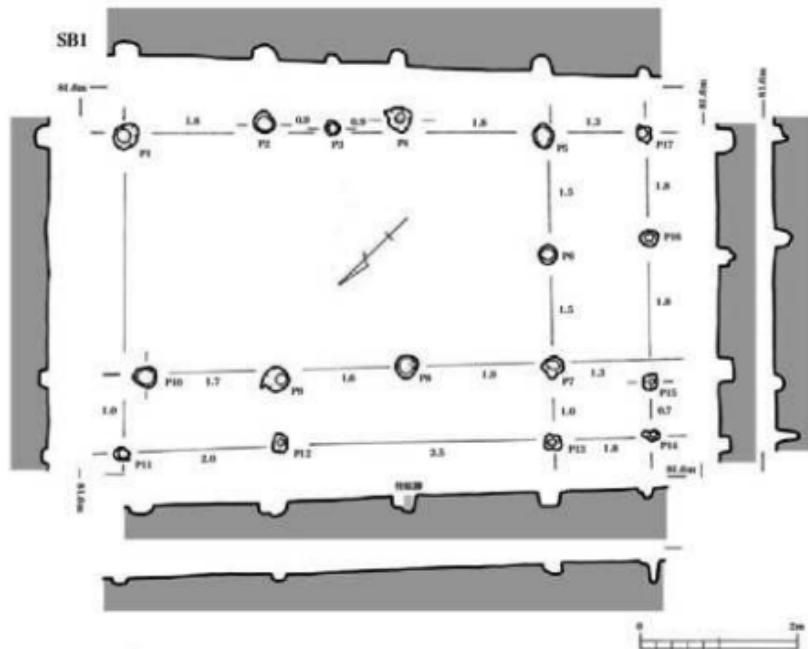
A区南側のD 8 グリッドで検出された。梁行2間 (1.3～1.5m)、桁行3間 (1.5～1.7m)、面積が約14.5m²を測る。柱穴は径約20cm～40cm、深さは8

SA1

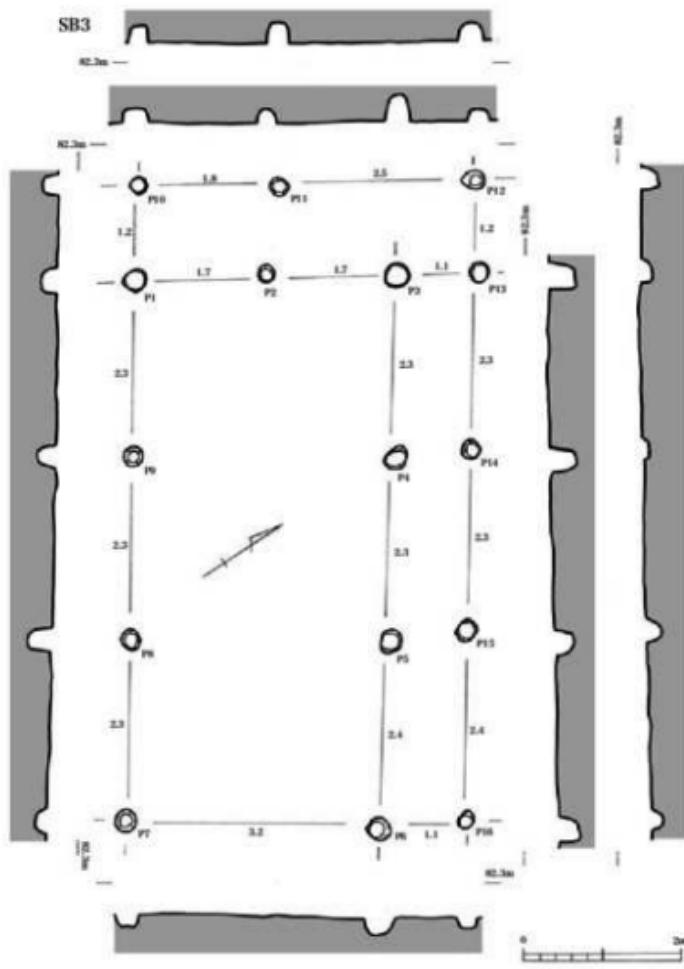
- ① 黒色土 (2.0YR 4/2) : 廃棄、オリーブ褐色土と (2.0YR 4/2) ブロックの跡を残す。
- ② 暗オリーブ褐色土 (2.0YR 4/3) : ①とは同質、中央部分をもつ。オリーブ褐色土と (2.0YR 4/2) を含む。
- ③ 暗オリーブ褐色土 (2.0YR 4/3) : ②の上に暗色地が漂り込む。
- ④ 暗オリーブ褐色土 (2.0YR 4/2) : ③の上に暗色地と (2.0YR 4/2) の相間のようになじむ。暗色地 (2.5mm粒度) も含む。



第16図 K-Ah降灰以降 SA1実測図 (S = 1/30)

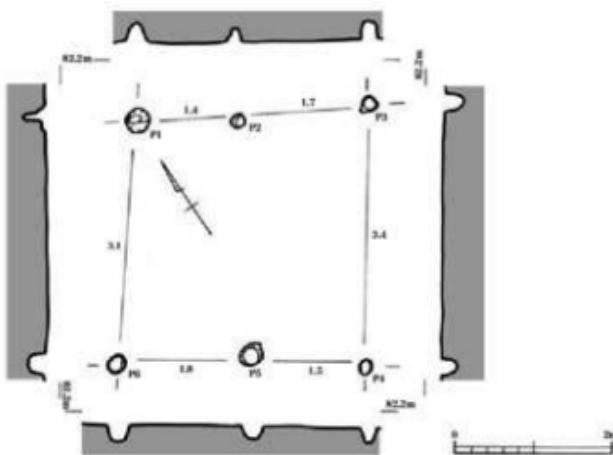


第17圖 K-Ah海螺以降SB1・2壳測圖 (S = 1/60)



第18圖 K-Ah 鏡框以SB3夾圈圖 (S = 1/60)

SB4



第19回 K-Ah層底以降SB4実測図 (S=1/60)

cm~42cmを測る。棟方向はN35°Eをとる。底をもたない。柱穴の埋土は若干粘性を帯びる黒色土で、K-Ah粒がブロック状に混じる。遺物は出土していない。

S B 3 (第18回)

A区北側のE 6グリッドで検出された。梁行2間(1.6~1.7m)、桁行3間(2.3~2.4m)、面積が約22.4m²を測る。柱穴は径約20cm~35cm、深さは8cm~36cmを測る。棟方向はN55°Wをとる。北東と北西の2面に底をもち、北東側が桁行8.3mで梁は1.1m、北西側が桁行4.3mで梁が1.2mを測る。柱穴の埋土は若干粘性を帯びる黒色土で、K-Ah粒がブロック状に混じる。遺物は出土していない。

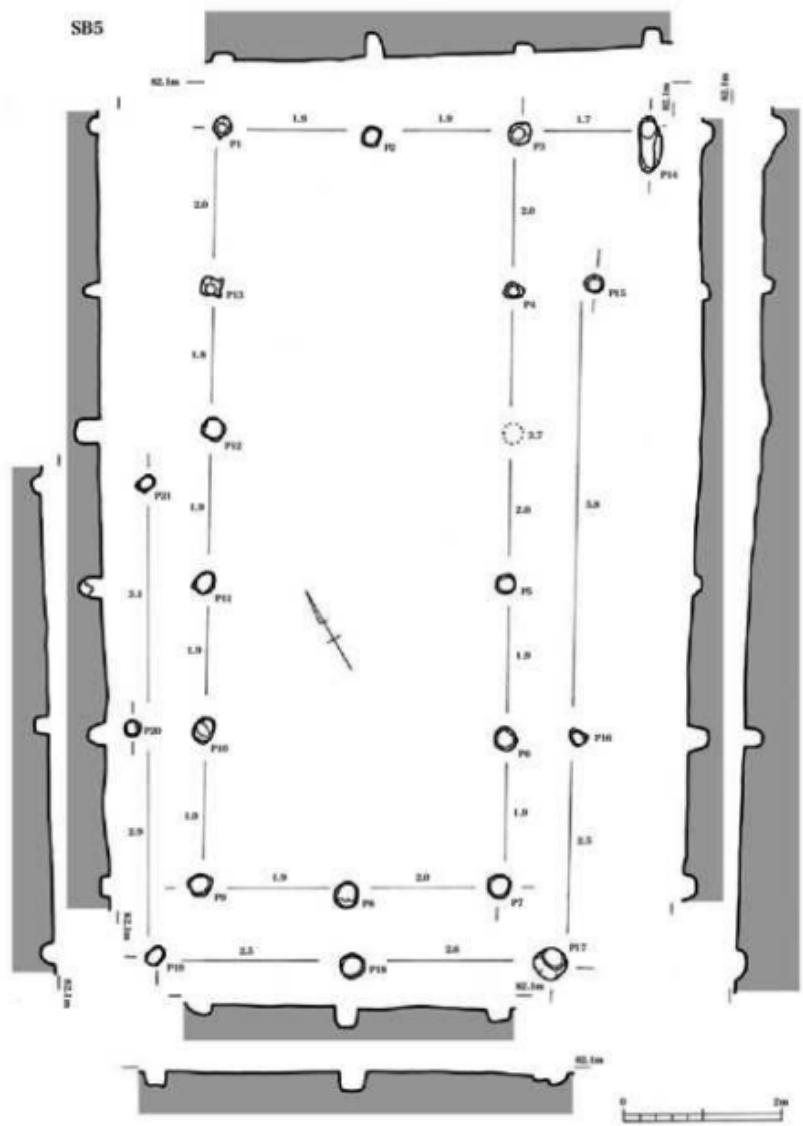
S B 4 (第19回)

A区北側のE 6グリッドでS B 3に重なるように検出された。梁行1間(3.1m)、桁行2間(1.3~1.7m)、面積が約9.6m²を測る。柱穴は径約14cm~26cm、深さは12cm~36cmを測る。棟方向はN58°Wをとる。底はもたない。柱穴の埋土は若干粘性を帯びる黒色土で、K-Ah粒がブロック状に混じる。S B 3と同じ位置にあるが、切り合がないため先

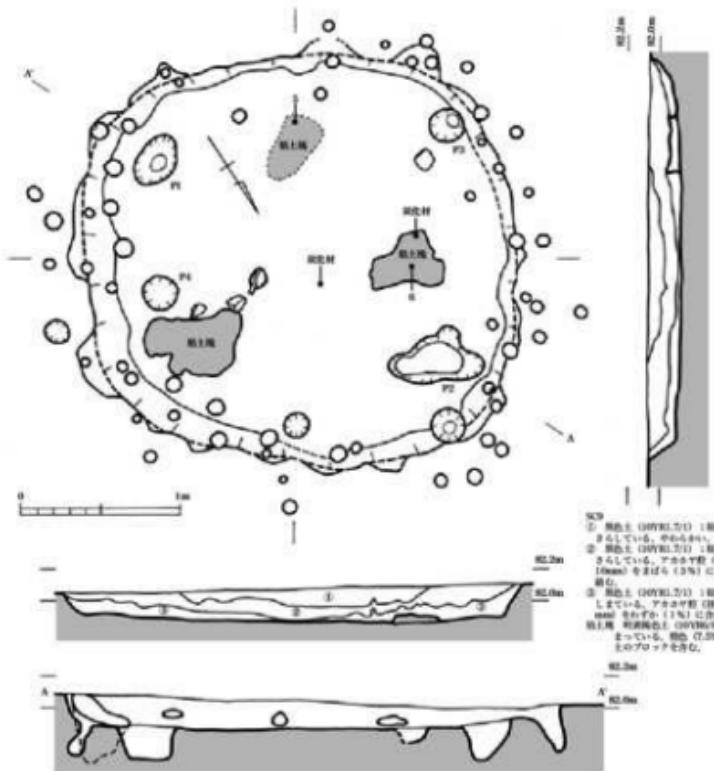
後関係は不明である。遺物は出土していない。

S B 5 (第20回)

A区東側のE 7グリッドで検出された。5棟の建物の中で最も大きく、梁行2間(1.8~2.0m)、桁行5間(1.7~2.0m)、面積が約38.2m²を測る。柱穴は径約2.0cm~30cm、深さは12cm~36cmを測る。棟方向はN31°Eをとる。北西・南東・南西に底をもち、北西側が桁行6.1mで梁が0.8m、南東側が桁行10.6mで梁が0.9m、南西側が桁行5.4mで梁が0.9mを測る。S E 2が建物内を横切るように検出された。付属する施設とは考えにくい。柱穴の埋土は若干粘性を帯びる黒色土で、K-Ah粒がブロック状に混じる。粘性の強いにぶい黄褐色土を下層にもつ柱穴があった。遺物は出土していない。S B 2はS B 5と棟方向がほとんど同じで縦に並び、S B 3は垂直で北西角に接しているため、3棟がL字の配置を成している。



第20回 K-Ah殻灰以降SB5実図 (S=1/60)



第21図 K-Ah跡地以降SC9実測図 (S = 1/30)



第22図 SC9出土土器実測図 (S = 1/3)

3) 土坑

S C 9 (堅穴状遺構) (第21図)

A区北側のD 6 グリッドで検出された。1辺約3mの開丸方形プランで周壁に小さなビットが巡る。検出面から床面の深さは最深部が23cmを測る。南北に2本の主柱穴 (P 1, P 2) を確認できた。深さは床面から22cm程度である。また、西と南東に柱穴

(P 3, P 4) を確認できた。周壁に巡るビットは、遺構の中心に向かって斜めに埋設され、重本を埋めていたものと思われる。床面には白色粘土層と焼土が集中する部分があり、破碎したと思われる赤化粧を伴う。埋土は、上層が粘性のほとんどない黒色土で、下層がK-Ah粒を含む黒色土でやや固くしまっている。遺物は、遺構西側の埋土中と北側の粘土塊

直上より上部器皿（第22図5、6）が出土した。この堅穴状遺構は、周辺の掘立柱建物に伴うカマドをもつ調理施設の可能性が考えられる。また、遺構の時期は埋土中の上部器皿から中世と考えられる。

S C 9については、床直上面から炭化材を試料として1点採取して放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。その結果、 810 ± 40 年BP（10の曆年で西暦1200～1270年）の年代値が得られ、コナラ属クヌギ節と同定された。

また、S C 9については、床直上面の試料1点を採取して植物珪酸体分析を実施した。その結果、S C 9の床直上面層の堆積当時は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）およびスキ属などが生育する草原的な環境であったと考えられる。（第4表）また、イネのプラントオバールが検出されていることから、周辺では稻作が行われていたか、住居の屋根材や敷物などとしてスキ属やイネの茎葉（葉）が利用されていた可能性も考えられる。

S C 1（第23図）

B区西側のE 4グリッドで検出された。検出面で $2.5m \times 4.5m$ の長方形で、深さは80cm程度である。上層・下層とともに隅丸方形である。埋土は、上層がK-Ahブロックを含む黒褐色土で、中位層は全体的に白斑粒子がまばらに混入する黒色土である。下層は黒褐色土。暗褐色土の2層に分かれ、最下層に褐灰色粘土層がある。遺物を伴わず、時期は不明であるが、埋土3層で高原スコリア（Kr-Th）が検出された。これにより中世以前のものであるといえる。

S C 2（第24図）

B区東側のI 7グリッドで検出された。円形で長径が1.25m、深さは25cm程度である。遺物は出土していない。

S C 3（第24図）

B区中央東側のG 7グリッドで検出された。S E 2の北端に接する。円形で長径が1.5m、深さは30cm程度である。埋土は、上層が白色粒・橙色粒を相に含む黒色土で、下層は固結した黒褐色土である。最下層に径1mm程度の橙色粒を多量に含む。遺物は出土していない。

S C 4（第24図）

B区中央のG 6グリッドで検出された。円形で長径が1.4m、短径が0.8m、深さは65cm程度である。埋土は、上層が白色・透明部細粒を含む黒褐色土で、中位層は軟質の黒色土である。下層は粘質の強い黒色土である。遺物は出土していない。

S C 5（第24図）

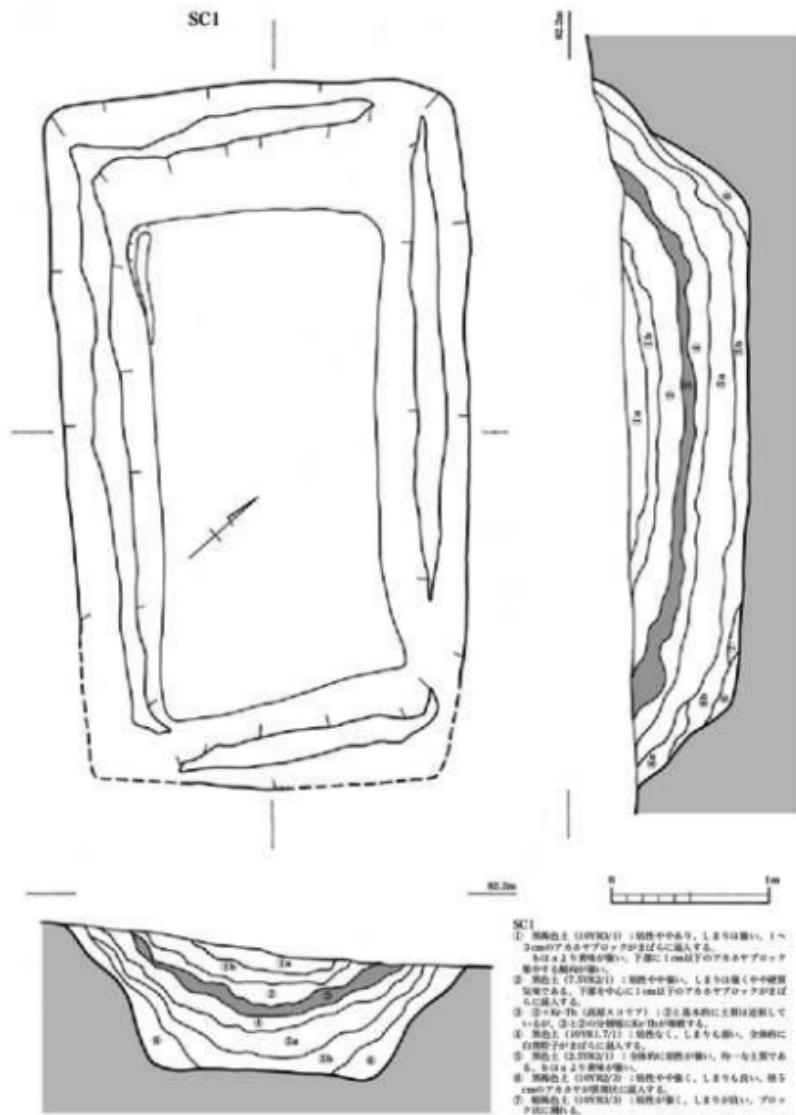
C区中央西側のJ 5グリッドで検出された。円形で径が90cm、深さは65cm程度である。埋土は上層が軟質の黒褐色土で、下層は同色のブロックが混じる褐灰色土である。最下層は褐灰色のブロックが雲斑状に入る黒色土である。遺物は出土していない。

S C 6（第24図）

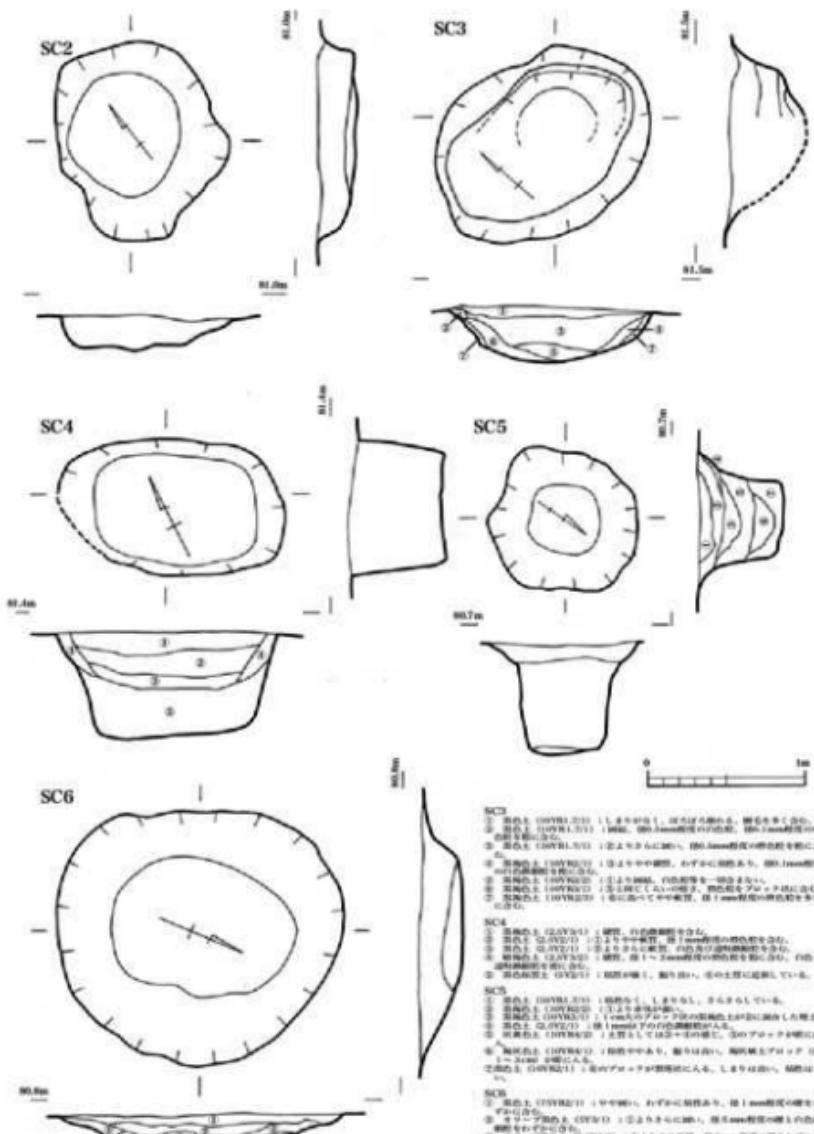
B区中央のH 4グリッドで検出された。円形で長径が1.8m、深さは25cm程度である。埋土は、上層がやや固く砂粒をわずかに含む黒色土で、下層が小礫を含むオリーブ黒色土である。最下層には礫を含まない。遺物は出土していない。

検出密度 (100cm ² ×100mm ³)	試料	イネ科				タケノコ科				その他のイネ科			
		イネ	Xanthorrhoea	リンドウ科	ラシナ科	メダケ節	メダケ節	コクサ科	ヒトツバタ科	未分類等	主毛植物	側用植物	未分類等
SC 9	I (埋土上部)	28	205	42	7	353	544	21	14	184	7	572	516

第4表 S C 9における植物珪酸体分析結果



第23回 K-Ah隊員以降SC1実測隊 (S=1/30)



第24図 K-Ah頁岩以降SC2～6実測図 (S = 1/30)

SC2
 ① 黒色土 (GIVR1.312) : 1.5mmの厚さ、柱状の構造ある。隔壁を多く含む。
 ② 黒色土 (GIVR1.313) : 1.0mm、0.5mmの隔壁の内側。
 ③ 黒色土 (GIVR1.314) : 厚さ不明。
 ④ 黒色土 (GIVR1.315) : 厚さ不明で2mmに近い。0.5mmの隔壁の外側を有する。
 ⑤ 黒色土 (GIVR1.316) : 1.5mmやや厚め、わずかの隔壁あり。
 ⑥ 黒色土 (GIVR1.317) : 1.0mmやや厚め、隔壁等を一切含まない。
 ⑦ 黒色土 (GIVR1.318) : 1.0mmやや厚め、隔壁等を一切含まない。
 ⑧ 黒色土 (GIVR1.319) : 1.0mmやや厚め、隔壁等を一切含まない。
 ⑨ 黒色土 (GIVR1.320) : 1.0mmやや厚め、隔壁等を一切含まない。
 ⑩ 黒色土 (GIVR1.321) : 厚さ不明で隔壁なし。
 ⑪ 黒色土 (GIVR1.322) : 厚さ不明で隔壁なし。

SC4
 ① 黒色土 (GIVR1.323) : 厚め、柱状の隔壁を含む。
 ② 黒色土 (GIVR1.324) : 1.5mmやや厚め、柱状の隔壁を含む。
 ③ 黒色土 (GIVR1.325) : 1.0mmの隔壁の内側を有する。
 ④ 黒色土 (GIVR1.326) : 厚さ不明で隔壁なし。
 ⑤ 黒色土 (GIVR1.327) : 厚さ不明で隔壁なし。このアーチが壁面に沿う。
 ⑥ 黒色土 (GIVR1.328) : 厚めやや厚め、隔壁なし。

SC5
 ① 黒色土 (GIVR1.329) : 厚め、柱状の隔壁を含む。
 ② 黒色土 (GIVR1.330) : 1.5mmやや厚め、柱状の隔壁を含む。
 ③ 黒色土 (GIVR1.331) : 1.0mmの隔壁の内側を有する。
 ④ 黒色土 (GIVR1.332) : 厚さ不明で隔壁なし。
 ⑤ 黒色土 (GIVR1.333) : 厚さ不明で隔壁なし。

SC6
 ① 黒色土 (GIVR1.334) : やや厚め、柱状の隔壁を含む。
 ② 黒色土 (GIVR1.335) : 1.5mmやや厚め、柱状の隔壁を含む。
 ③ 黒色土 (GIVR1.336) : 1.0mmの隔壁の内側を有する。
 ④ 黒色土 (GIVR1.337) : 厚さ不明で隔壁なし。
 ⑤ 黒色土 (GIVR1.338) : 厚さ不明で隔壁なし。

4 溝状遺構

1 K-Ah残存エリア検出の溝状遺構（第15図）

S E 1

A～B区を東西に走る。全長4m以上、幅0.5m～0.7m、深さは2cm～10cmを測り、断面形は皿形である。底面は西から東に向かい傾斜する。埋土は、K-Ah粒を含む黒色土である。遺物は出土していない。

S E 2

A～B区を東西に走る。全長16m以上、幅0.5m～1.0m、深さ7cm～10cmを測り、断面形は皿形である。底面は西から東に向かい傾斜する。埋土は、K-Ah粒を含む黒色土である。遺物は出土していない。

S E 3

B～C区を南北に走る。全長17m以上、幅0.4m～0.7m、深さ20cm～30cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は南から北に向かい傾斜する。埋土は、上層が白色微細粒を密に含む黒色土で、下層に黒色土と暗褐色土の2層の硬化面をもつ。硬化面を形成している層は、幅35cm～50cm、厚さ6cm～12cmを測る。道路状遺構の可能性がある。遺物は出土していない。

S E 9

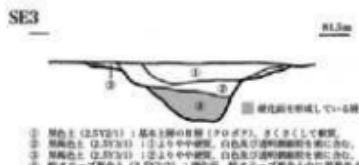
C区を東西に走る。全長6m以上、幅0.5m～0.8

m、深さ15cm～18cmを測り、断面形は皿形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、K-Ah粒を含む黒色土である。遺物は出土していない。

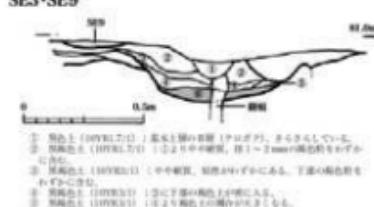
SE2



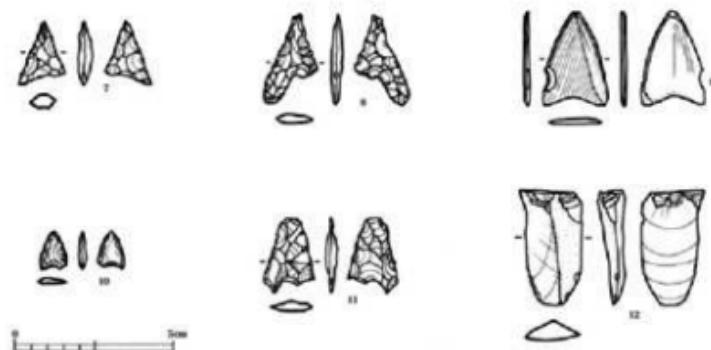
SE3



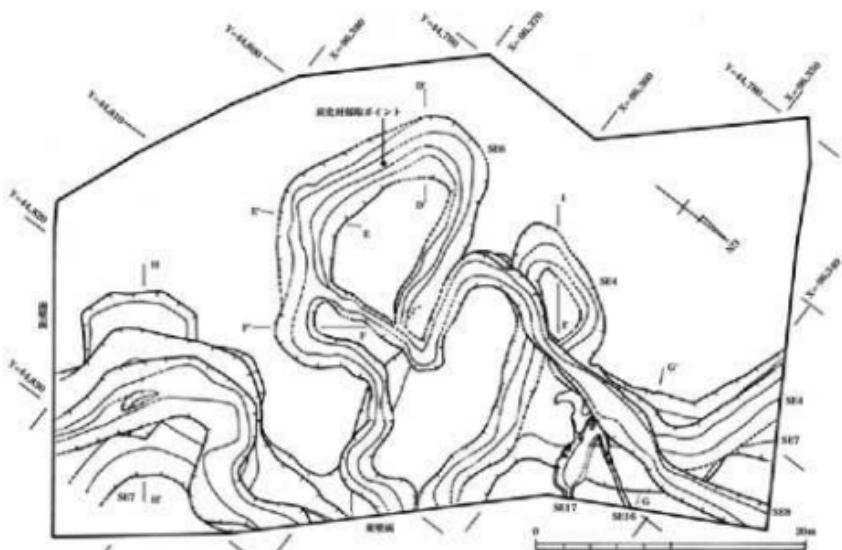
SE3・SE9



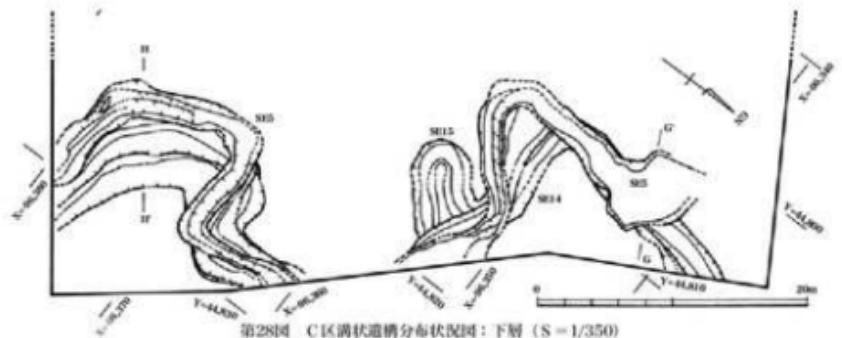
第25図 SE2・3・9上断面図 (S=1/20)



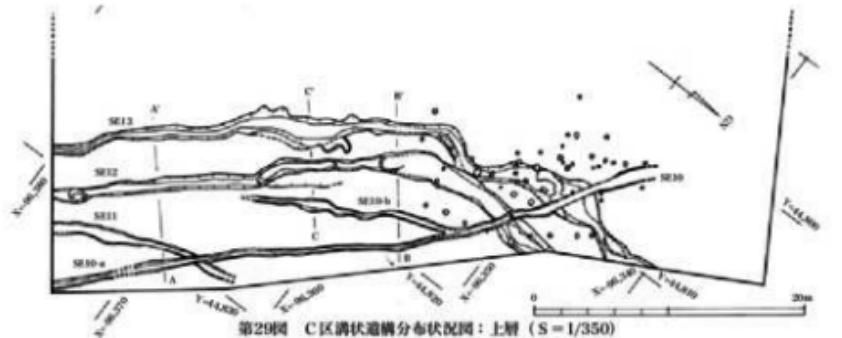
第26図 溝状遺構出土遺物実測図 (S=2/3)



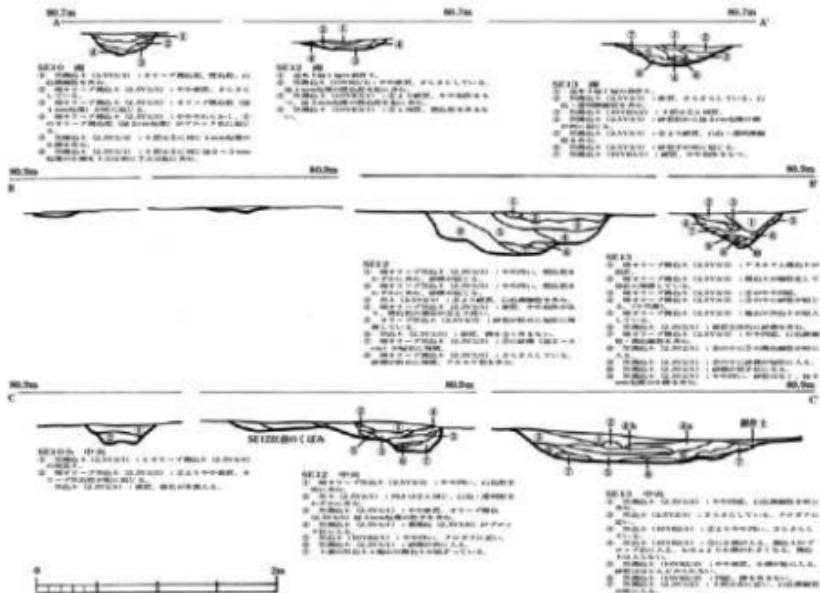
第27図 C区(溝状隙構分布状況図:最下層) (S = 1/350)



第28図 C区(溝状隙構分布状況図:下層) (S = 1/350)



第29図 C区(溝状隙構分布状況図:上層) (S = 1/350)



第30図 SE10～13上層断面図実測図 (S=1/40)

2 K-Ah残存がみられないエリアの調査状況

C区において1b層を除去して精査した面を上層とし、下部については、谷部を形成している溝をサブトレンチの上層を参考にして2層に分け、上を下層、下を最下層とした。

上層 (第29図)

S E 10

C区を南北に走る。全長45m以上、幅0.4m～0.8m、深さ10cm～17cmを測り、断面形は皿形である。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、上層がオリーブ褐色の細粒を含む暗オリーブ褐色上で、下層は小礫を密に含む黒褐色土である。底面で径5cm程度の角礫を数点確認した。遺物は上層器片が3点出土した。

S E 11

C区を南北に走る。全長13m以上、幅0.4m～1.0m、深さ3cm～6cmを測り、断面形は皿形であ

る。底面は北から南に向かい傾斜する。遺物は、外面格子目タタキの土器片 (第36図22) が出土した。

S E 12

C区を南北に走る。全長40m以上、幅0.6m～2.0m、深さ10cm～35cmを測り、断面形は皿形である。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、上層がオリーブ黒色土でK-Ah粒 (径1cm) を密に含む。下層はK-Ah粒を含まない暗オリーブ褐色土で砂粒や小礫を密に含む。遺物は、調片が3点と備前系の陶磁器片 (図版58) や須恵器片が3点出土した。

S E 13

C区を南北に走る。全長45m以上、幅0.4m～2.0m、深さ15cm～30cmを測り、断面形は皿形である。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、上層がオリーブ黒色土でK-Ah粒 (径1cm) を密に含む。下層はK-Ah粒を含まない暗オリーブ褐色土で砂粒や小礫を密に含む。遺物は常滑 (図版62、63) や

備前系(図版56、57、59、61)の陶器片、土師器片。弥生土器の高环脚部(第36図23)など21点が出土した。石器は黒曜石とチャートの石器(第26図10・11)がそれぞれ1点ずつと剥片が7点出土した。12は、チャートの剥片である。

下層(第28回)

S E 5

C区を東西に走る。全長50m以上、幅1.7m~5.2m、深さ40cm~49cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、上層が黄褐色細粒を含むやや軟質の黒色土である。下層は暗オリーブ褐色土で底面に近づくほど小礫・砂礫が密に入る。遺物は剥片が5点、磨滅の激しい塊の底部(第36図28)を含む弥生土器片が5点出土した。

S E 14

C区を南北に蛇行して走る。全長50m以上、幅1.4m~4.3m、深さ52cm~69cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、白色、透明微細粒を密に含む黒褐色土で、上層はやや固くしまっていて下層はやや軟質である。底面は砂礫が混じる。遺物は剥片が1点、弥生土器片が7点出土した。

S E 15

C区を南北に蛇行して走る。全長50m以上、幅1.6m~5.8m、深さ36cm~86cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は全体的に黒色土で、上層は白色粒を含む。中位層には土器片と小礫が含まれる。下層には砂粒が筋状には入り、底部は暗褐色の疊層と部分的に混在する。U字にカーブする遺構内部に径10cm~40cmの礫が集中する。遺物は数多く出土した。

14は口縁が大きく外反する壺の小片である。15は口縁端部が肥厚し、撲でて平頭にしている壺の小片である。16は一条刻目突帯で口縁に屈曲ではなく、端部は平坦な下城式の壺である。19は頸部からやや外反する口縁をもつ壺である。20は頸部から口縁部にかけて内外面にヘラ磨きを施した大型の壺である。24は頸部に四条貼付突帯をもつ大型の壺である。25~27は口縁が斜方向に折れて外反し、胸部は全

体に細かいハケ目を施した弥生土器の壺である。U字にカーブする遺構内部の礫が集中する箇所から出土した。石器は石器が1点と剥片が3点出土した。溝底部の砂礫層から鉄器(第26図30)が出土した。全長が約7cm、刃部幅が約1.8cm、茎部幅が約1.5cmである。さびくくれがあり、刃部の厚みは不明で刃先が折れていると思われる。茎部の断面は方形、鎌身部の外形は柳葉形に近く、断面は平造りか片丸造りと思われる。

最下層(第27回)

S E 4

C区を南北に蛇行して走る。全長50m以上、幅2.1m~6.9m、深さ76cm~122cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、K-Ah粘を含む黒色土である。南側(川下)の右岸、左岸の両方の壁に2列の小穴群を検出した。径が17cm~24cmである。用途は不明だが、川の両岸に柵を設けていたと思われる。遺物は、埋土中より弥生土器の小片が17点出土した。石器はローリングを受けてかなり磨滅した姫島産黒曜石製の石器と基部に抉りを入れ脚部をもつチャート製の石器(第26図8)。剥片が6点が出土した。

S E 6

C区の西側で検出された。全長27m以上、幅2.5m~4.8m、深さ15cm~135cmを測り、かなり深い。断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、上層がやや軟質の黒色土で、中位層になるとやや固くなる。中位層は黒褐色土または暗オリーブ褐色土でK-Ah粘・オリーブ褐色土を多量に含む。下層はオリーブ褐色土でオリーブ褐色土とVIIb層の明黄褐色土を含む。底面は礫を密に含む。2箇所あるS E 8との合流地点の上流側には、5本の小穴群を検出した。径が約20cmで深さが検出面から10cm足らずであった。用途は不明である。遺物は底面から磨製石器(第26図9)が1点、埋土中位層より上部器の环の小片が4点出土した。部位は底部でヘラ切りの痕跡があった。

S E 6については、溝底部から出土した炭化材を試料として採取し、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施した。その結果、 3470 ± 40 年BP (1σの曆

年代で西暦紀元前1870～1730年）の年代値が得られ、コナラ属クヌギ節と同定された。この炭化材が縄文時代後・晩期のものと推定されるが、流れ込みの可能性が高いと思われる。

S E 7

C区を南北に蛇行して走る。全長50m以上、幅4.5m～11.8m、深さ62cm～102cmを測り、調査区内で最も大きく、谷部を形成する流路である。断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、上層が透明光沢粒を含む黒褐色土で、下層はK-Ah粒を含む黒色土である。最下層の上層部に砂礫、暗褐色粒が筋状にある。遺物は、底部の直径が9cm余りある甕の底部（第36図29）、尖端をもつ甕の口縁部（第36図17）や外面がタタキ目の甕など弥生土器の小片が28点出土した。石器は磁島産黒曜石製の石器（第26図7）が1点と剥片が4点出土した。

S E 8

C区を南北に蛇行して走る。全長50m以上、幅1.1m～2.8m、深さ42cm～76cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南に向かい傾斜する。埋土は、白色微細粒を密に含む黒色土で部分的にオリーブ黒色土もある。下層は粘性があり、底面には円礫と砂礫を密に含む。遺物は、二重口縁部に龍猫頭面文を施した複合口縁甕（第36図13）と甕の口縁部と思われる小片（第36図18）が出土した。他8点は弥生土器の小片で、石器は剥片が2点出土した。

S E 16

C区を南北に走る。全長6m以上、幅0.13m～0.6m、深さ3cm～15cmを測り、断面形は皿形である。底面の1部に小穴（径20cm～30cm）を2箇所有する。S E 17と合流する。底面は北から南に向かい傾斜する。遺物は出土していない。

S E 17

C区を東西に走る。全長7m以上、幅0.65m～1.8m、深さ7cm～30cmを測り、断面形は皿形である。底面の1部に小穴（径25cm～30cm）を5箇所有する。S E 4と合流するが、その手前の底面に硬化した広がりをもつ。底面は東から西に向かい傾斜

する。遺物は出土していない。

S E 6・7・8・15の時期の植生と環境

(1) 植物珪酸体分析

S E 6は埋土最上部から最下部までの試料を7点、S E 7は溝の埋土下部から1点と埋土底部から2点、S E 8は埋土底部から1点、S E 15は、溝の埋土底部から1点をそれぞれ採取して植物珪酸体分析を実施した。その結果（第5表）、S E 6の埋土の堆積当時は、遺構周辺はメダケ属（メダケ節やネザサ節）などのタケ亜科が繁茂する状況であったと考えられ、部分的にススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られたと推定される。また、溝底部の堆積当時には、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと考えられ、埋土最上部の時期には調査地もしくはその近辺で耕作が行われていたと推定される。

その他の溝状遺構についても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、S E 15の埋土底部の堆積当時には、周辺にカシ類などの樹木（照葉樹）も分布していたと推定される。

(2) 花粉分析

S E 6・7・8・15のそれぞれの埋土底部から試料を採取して花粉分析を実施した。その結果（第6表）、S E 8およびS E 15の埋土底部の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科を主体としてタンボボ科やキク科なども生育する比較的乾燥した人里の環境であったと推定される。森林植生としては、周辺地域にナラ林（コナラ属コナラ亜属）やカシ林（コナラ属アカガシ亜属）などが分布していたと考えられ、S E 15の周辺にはクリも生育していたと推定される。

S E 6およびS E 7については、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、S E 8やS E 15とおおむね同様であったと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾燥を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

(3) 珪藻分析

S E 6・7・8・15のそれぞれの埋土下部もしくは底部から試料を2点ずつ計8点を採取して珪藻分

析を実施した。その結果(第7表)、SE6・7・8・15の埋土の堆積当時は、珪藻の生育にはあまり通さない比較的乾燥した環境であったと考えられる。遺構内部は通常に滞水するような環境ではなく、時期や季節によって短期間滞水するような状況

であったと推定される。

遺構名	試料	イネ科						タケ科						その他のイネ科				樹木起源				
		イネ	キビ	ヒツジ	クサ	ススキ	カシワ	カシワA	カシワB	カシワC	カシワD	カシワE	カシワF	カシワG	カシワH	カシワI	カシワJ	カシワK	カシワL	ブナ科	その他の	
SE6	1(埋土上部)	7	7			73	22	7	471	747	7								131	15	312	312
	2(埋土上部)					49	56		421	568	35	56	288	28	695	618						
	3(埋土中上部)		7			28	77		428	604	28	28	253	35	709	506						
	4(埋土中中部)	7	7	15	73	7	476	783	51	15	498	7	812	747								
	5(埋土中下部)	7	14	27	54	7	230	691	47	47	291	20	704	670								
	6(埋土下部)	21	21	69	28	7	304	717	97	55	186	14	545	455								
	7(死土底下部)					29	78	7	243	692	71	93	228	21	842	728						
SE7	1(埋土上部)	7	7	37	37				162	700	81	52	140						383	575		
	2(埋土中中部)		15			37	30		222	614	67	59	192	15	643	577						
	3(埋土下部)		7			46	13		225	568	33	80	145	26	363	588						
SE8	1(埋土底部)			13	19				147	351	45	70	115	13	204	409						
SE15	1(埋土底部)		14	7	50	43			301	545	79	57	136	14	40	581	7	7				

第5表 SE6・7・8・15における植物付随分析結果

分類群	樹木花粉						草本花粉						シダ植物孢子						
	ツガ属	落葉松属	ハレ属	クリ	マツバ属	コナラ属	アカガシ属	ハレ属	カシワ属	クサ属	オシダ属	クサ属	セリ属	テンポク属	カズラ属	ヨモギ属	無機質	無機質	無機質
SE6	1	1			5	1	8		16		1			10	17	32	2	3	
SE7					1	1	1	1	9	1		1					8		
SE8						11	5		33	3		3	3	5	66	4	3		
SE15	1		1	4		8	4		40		2			7	70	5	3		

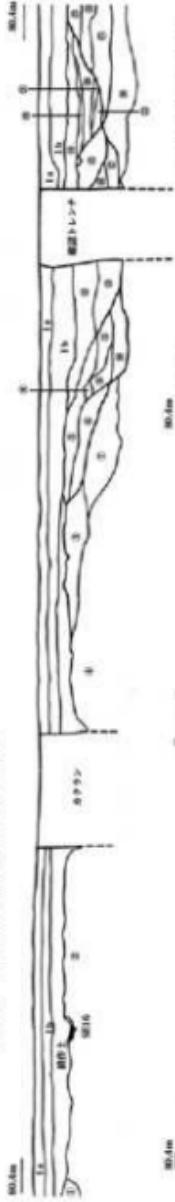
第6表 SE6・7・8・15における花粉分析結果

試料	SE6		SE7		SE8		SE15	
	1	2	1	2	1	2	1	2
Cymbella amphioxys			1					
Gomphonema gracile								2
Gomphonema sp.								1
Pinnularia borealis							1	2
Rhopalodia gibberula							1	
合計	0	0	1	0	0	2	0	5
未判定	0	0	0	0	0	0	0	0
総片	1	2	6	2	0	14	0	2
試料1cm ³ 中の孢子密度	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0	4.0	0.0	2.0
			×10 ³			×10 ³		×10 ³
完形殻保存率(%)	0.0	0.0	14.3	0.0	0.0	12.5	0.0	71.4

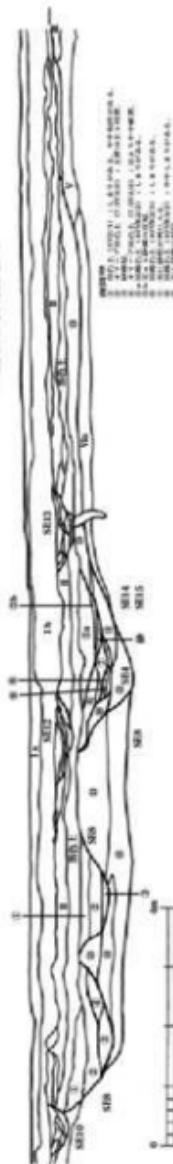
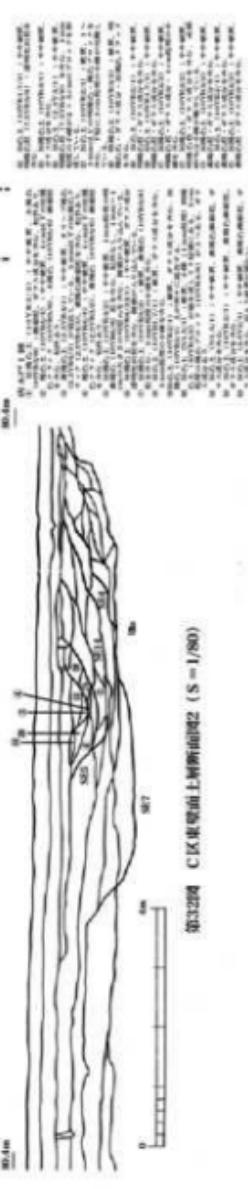
第7表 SE6・7・8・15における珪藻分析結果



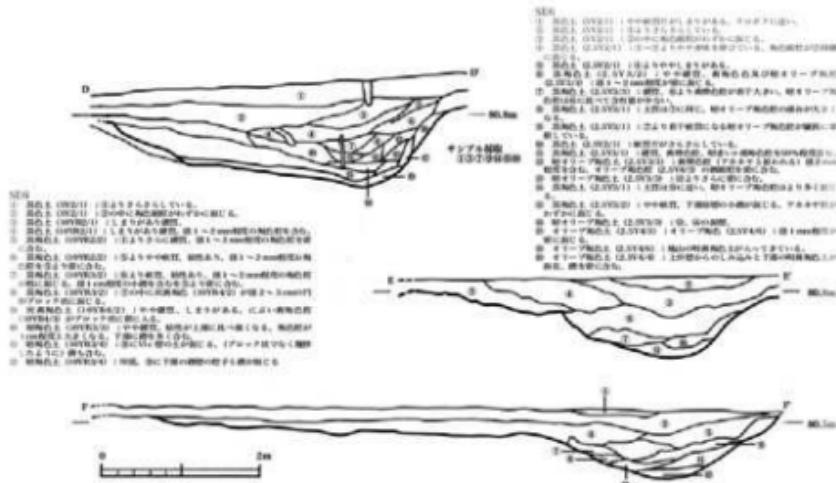
第31图 C区东界面上断面图1 ($S = 1/80$)



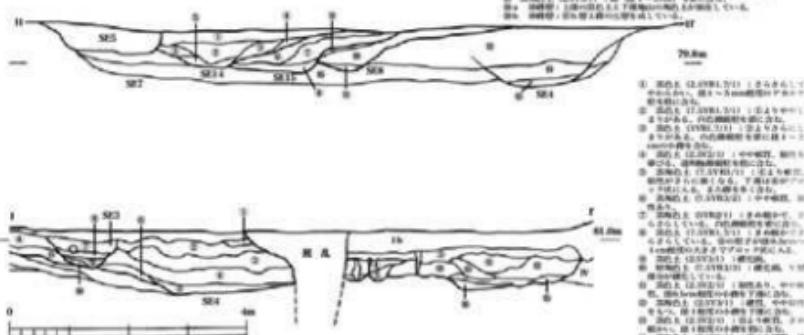
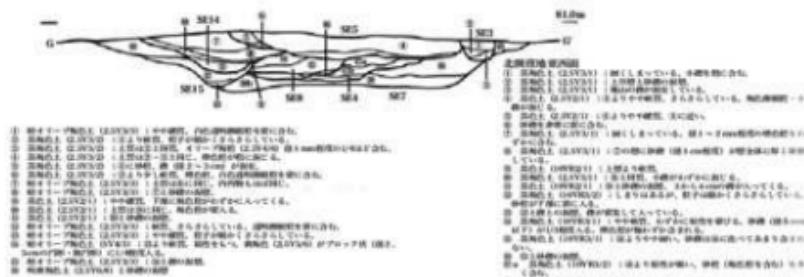
第32图 C区南界面上断面图2 ($S = 1/80$)

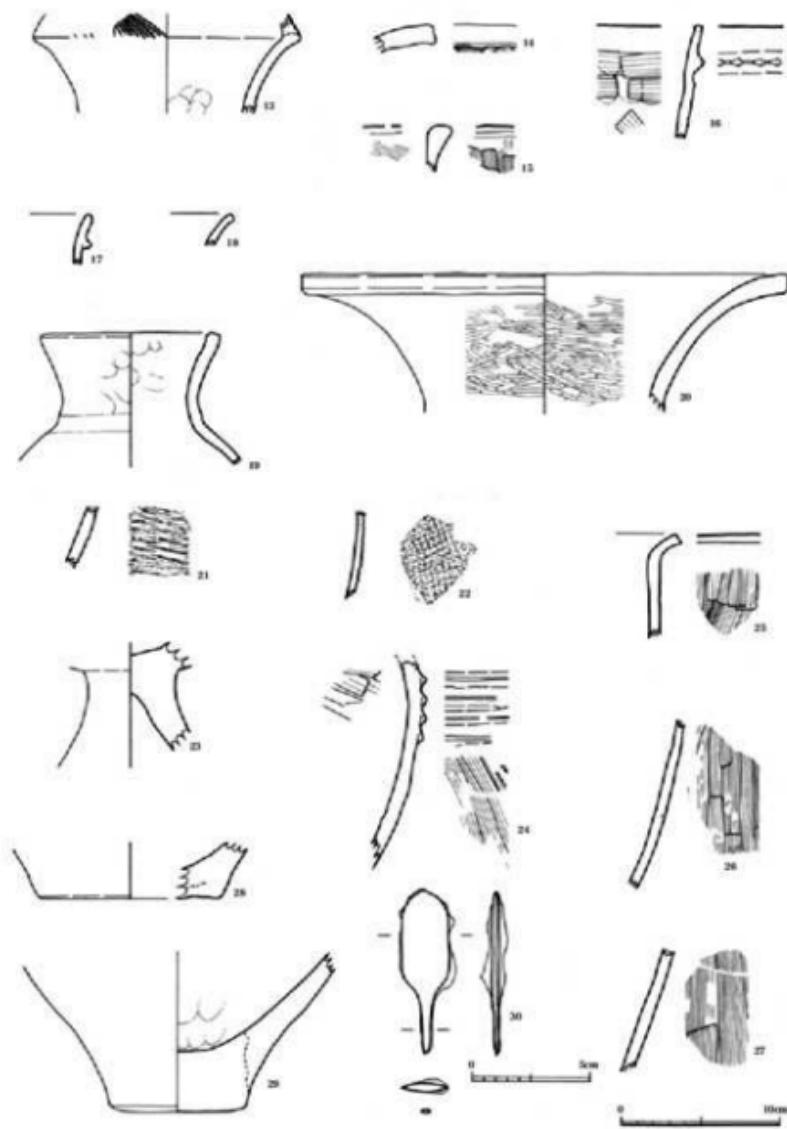


第33图 C区南界面上断面图4 ($S = 1/80$)

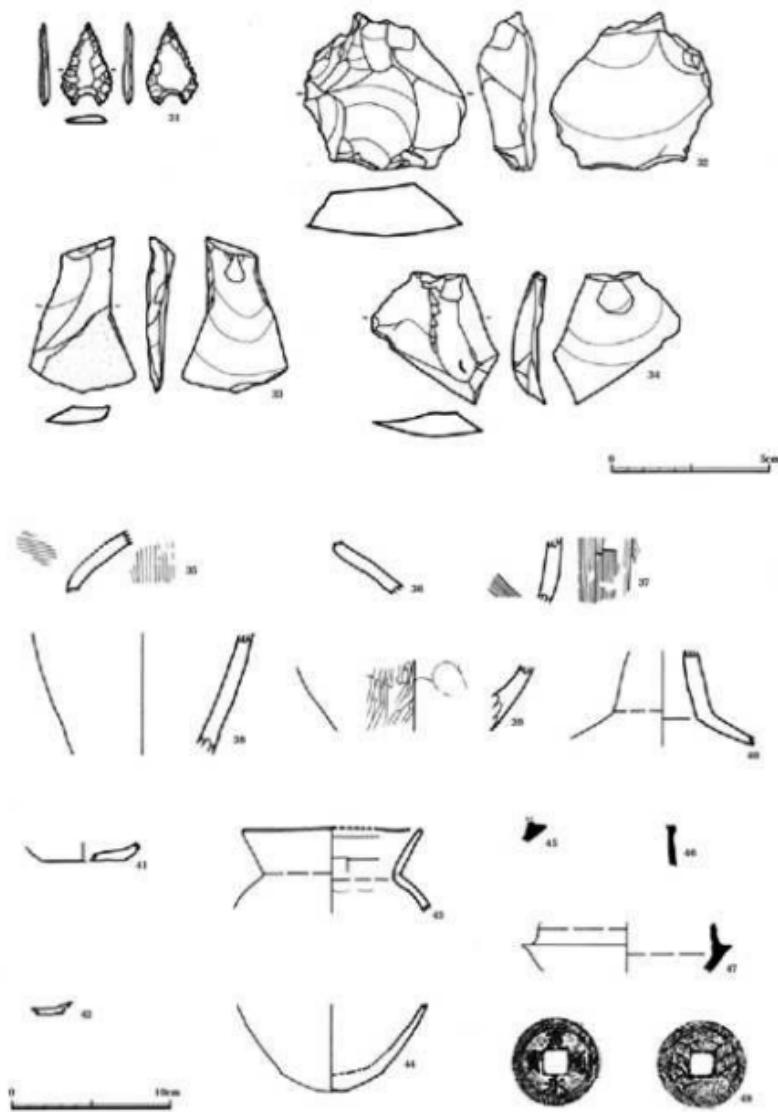


第34図 SE6上層断面図 (S = 1/60)





第36图 满状组上部物类图 (S = 1/3, 30 : 1/2)



第37圖 遺構外出土遺物実測図 (S = 2/3, 35~47 : 1/3)

5 造構外出土遺物

石器（第37図31～34）

31は石礫でチャート製である。A区東側から出土した。宅地造成のために削平された範囲からの出土なので時期は不明である。32と34は流紋岩製の調片であるが、いずれもC区北側の後世に掘られた土坑底部の砂礫層から出土した。土石流による流れ込みと考えられる。33は砂岩製の調片であるが、K-Ahの残存していないC区西側の暗褐色土上面から出土した。

土器（第37図35～47）

37から40は弥生土器片である。35と36と38は後世土坑底部の砂礫層から出土した。土坑底部には、S E 7の最深部があることからそこからの出土と考えられる。37と39と40は、S E 6が周りを巡る浮島状の黒色土中より出土した。

41と42は土師皿でいずれも底部がへラ切りであった。43と44は土師器の壺で同一個体と考えられる。4点ともC区東側のS E 10とS E 11に挟まれた岸邊から出土した。谷部がすでに埋没した時期（古墳時代以降）の遺物と考えられる。

45から47は須恵器片で45と47は环身の立ち上がり部、46は环蓋の口縁部である。いずれもC区北側で出土し、S A 1とその東側にある小穴群に関係のある遺物と考えられる。

48は貨幣で寛永通寶である。C区南側の黒色土中より出土した。

測定番号	測定位置	標識	測量	層位	法量 (cm)		手法・調査・又探査		色・調		地土の特徴	備考
					山根	底根	表面	内面	外表面	内面		
5	SE9	上端部	Ⅲ	底根	7.7		ナガヘラ切り	回転ナガ	灰青褐色	にじの若狭	細緻な褐色の粉を含む	塊成は良好
6	SE10	上端部	Ⅲ	底根	5.7		回転ナガヘラ切り	回転ナガ	にじの若狭	細緻な褐色の粉を含む	塊成は良好	
7	SE11	全体	Ⅲ	口縁～側縁			ナガヘラ切り鋸歯	ナガヘラ鋸歯あり	浅青色	淡青	4mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	二重の縁部
8	SE12	全体	Ⅲ	口縁部			ナガヘラ鋸歯	ナガヘラ	にじの若狭	細緻な褐色の粉を含む	スル付表	
9	SE13	全体	Ⅲ	口縁部			ナガヘラ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
10	SE14	全体	Ⅲ	口縁部			ナガヘラ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
11	AE03	全体	Ⅲ	口縁部			ナガヘラ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	下端付表
12	M7	全体	Ⅲ	口縁部			ナガヘラ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	風化が進む
13	SE15	全体	Ⅲ	口縁部	11.4		ナガヘラ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	口縁部はスル付表
14	SE16	全体	Ⅲ	口縁部	21.0		ヘラムガタ	ヘラムガタナガ	にじの若狭	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	大変の重
15	SE17	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
16	SE18	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
17	SE19	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
18	SE20	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
19	SE21	全体	Ⅲ	口縁部	11.4		ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
20	SE22	全体	Ⅲ	口縁部	21.0		ヘラムガタ	ヘラムガタナガ	にじの若狭	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	大変の重
21	SE23	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
22	SE24	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
23	SE25	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
24	SE26	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	風化が進む
25	SE27	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	大型・スル付表
26	SE28	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
27	SE29	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
28	SE30	全体	Ⅲ	口縁部	11.4		ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
29	SE31	全体	Ⅲ	口縁部	9.2		スコナガ	スコナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
30	H2	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
31	H2	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
32	H2	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
33	GE	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
34	GE	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
35	GS	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
36	GS	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
37	GS	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
38	GS	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
39	GS	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
40	GS	全体	Ⅲ	口縁部			ナガ	ナガ	回転部	にじの若狭	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	
41	SE1	上端部	Ⅲ	底根	5.6		ナガ	ナガ	回転ナガ	ナガ	にじの若狭	塊成は良好
42	SE1	上端部	Ⅲ	底根			ナガ	ナガ	回転部	淡青	2mm以下の中・灰青・灰褐色の粉を含む	塊成は良好
43	SE1	上端部	Ⅲ	口縁～側縁	11.2		ナガ	ナガ	回転ナガ	ナガ	にじの若狭	塊成は良好
44	SE1	上端部	Ⅲ	底根			ナガ	ナガ	回転ナガ	ナガ	にじの若狭	塊成は良好
45	H4	底根部	Ⅲ	上端が付根			回転ナガ	回転ナガ	灰	灰	回転	
46	H4	底根部	Ⅲ	底根			回転ナガ	自然軸	回転ナガ	オリーブ	回転	
47	G1	底根部	Ⅲ	上端が付根			回転ナガ	工芸軸	回転部	淡青	回転	外側に自然軸

第8表 アカホヤ陶灰以降出土土器観察表

番号	注記番号	出土位置	断続	石	材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	X座標	Y座標	レベル(m)
7	326	SE7	石	礫	恵島産灰岩	2	1.5	0.4	0.8	-96369.995	44818.067	80.579
8	299	SE4	石	礫	チャート	2.8	1.7	0.4	1.2	-96354.011	44804.853	80.15
9	94	SE6	磨製石	綠色凝灰岩		2.95	2	0.2	1.2	-96373.146	44806.34	80.797
10	112	SE13	石	礫	赤木産凝灰岩	1.2	0.9	0.2	0.2	-96355.319	44811.971	80.47
11	115	SE13	石	礫	チャート	2.4	1.6	0.4	1.1	-96353.355	44811.177	80.569
12	114	SE13	調	片	チャート	3.6	2	0.65	4.9	-96354.602	44811.774	80.45
31	E9	石	礫	チャート		2.55	1.6	0.3	1.1		データ無し	
32	133	H2	調	片	西羽	6.6	6.85	2.45	98.2	-96335.243	44801.144	80.431
33	128	F5	調	片	砂岩	6.55	4.45	1.15	20.6	-96369.075	44781.65	81.481
34	134	H2	調	片	西羽	5.55	5.35	1.45	27.6	-96333.02	44804.668	80.154

第9表 アカホヤ陶灰以降出土石器観察表

第V章 自然科学分析

1 はじめに

唐木坪第2遺跡では、遺構に伴う遺物出土が極少量であり、調査区の半分弱にK-Ah火山灰が残存していない。以上のことから、自然科学分析によって年代の推定、古環境の復元及びその変遷を図る必要がある。

2 S C 9 と S E 6 における放射性炭素年代測定

(1) 目的

S C 9 と S E 6 については、床面から出土した炭化材より、遺構が使用されていた年代の測定を行うために、放射性炭素年代測定を実施した。

(2) 試料と方法 (第10表)

(3) 測定結果 (第11表)

(4) 考察

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、SC 9 床面の炭化物(No.1)では 810 ± 40 年BP (1 σ の曆年代で西暦1200~1270年)、SE 6 底部の炭化物(No.2)では 3470 ± 40 年BP (1 σ の曆年代で西暦紀元前1870~1730年)の年代値が得られた。

3 S C 9 と S E 6 における樹種同定

(1) 目的

S C 9 と S E 6 については、床面から出土した炭化材よりその木材の属レベルの同定を行い、近隣の森林植生の推定や木材の利用状況及び流通を探る手がかりとするために、樹種同定を実施した。

(2) 試料

試料は、S C 9 及び S E 6 から採取された炭化材 2 点である。

(3) 樹種同定結果

S C 9 : コナラ属クヌギ節

Quercus sect. Aeglops ブナ科

S E 6 : コナラ属クヌギ節

Quercus sect. Aeglops ブナ科

(4) 考察

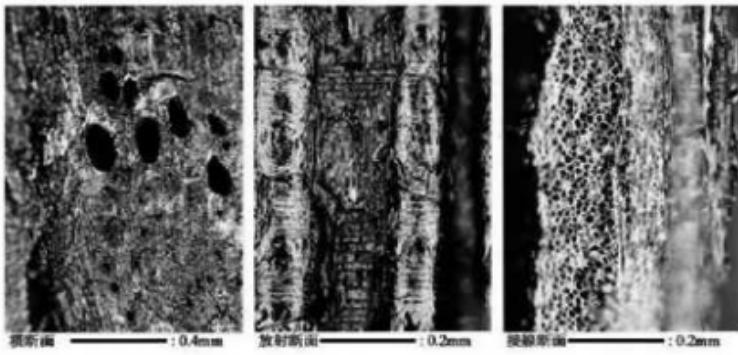
S C 9 及び S E 6 から採取された炭化材は、コナラ属クヌギ節と同定された。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で彈力に富み、器具、農具などに用いられる。

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SC 9 床面	炭化材	酸-74%+酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.2	SE 6 底部	炭化材	酸-74%+酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

第10表 SC9とSE6における放射性炭素年代測定の試料と方法

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代(西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	870 ± 40	-28.5	810 ± 40	交点: cal AD 1240 1 σ : cal AD 1200~1270 2 σ : cal AD 1170~1280	171657
No.2	3520 ± 40	-27.8	3470 ± 40	交点: cal BC 1760 1 σ : cal BC 1870~1730 2 σ : cal BC 1890~1690	171658

第11表 SC9とSE6における放射性炭素年代測定結果



SC9 コナラ属クヌギ類

4 S E 6・7・8・15、S C 8・9における植物珪酸体分析

(1) 目的

遺構埋土の堆積した当時の植生やそこに生息していた動物や採取された動植物質食料について推定を行うために、植物珪酸体分析を実施した。

(2) 試料

分析試料は、S E 6・7・8・15、S C 8・9の6地点から採取された計15点である。試料採取箇所を分析結果図（第38図、第39図）に示す。

(3) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群、その結果を第12表及び第38図、第39図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

① S E 6

溝の埋土（試料1～7）について分析を行った。その結果、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、スキ属型、ウシクサ族A、キビ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、理土下部（試料4～6）ではヨシ属、埋土最上部（試料1）ではイネも検出された。イネの密度は700個/gと低い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にメダケ節型やネザサ節型が卓越していることが分

かる。

② S E 7

溝の埋土下部（試料1）及び埋土底部（試料2、3）について分析を行った。その結果、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、スキ属型、ウシクサ族A、キビ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、理土下部（試料1）ではヨシ属も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、メダケ節型やネザサ節型が卓越していることが分かる。

③ S E 8

溝の埋土底部（試料2）について分析を行った。その結果、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、メダケ節型やネザサ節型が卓越していることが分かる。

④ S E 15

溝の埋土底部（試料2）について分析を行った。その結果、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、ブナ科（アカガシ亜属）などの樹木（照葉樹）も検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過

輸出密度 (単位 : × 100kg/g)

分類別	学名	地名・品種		SE6		SE7		SE8		SE15		SE8		SC9	
		1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	2	3	1
イネ科 キビ属	Gramineae/Grasses														
オムレツ	Oryza sativa/indica/rice	7	7	7	7	21	7	15	7	13	7	14	35	7	28
コシ属	Panicum type	7	7	7	14	21	7	37	37	46	19	50	7	7	7
ススキ属	Phragmites/reed	73	40	28	15	27	69	39	37	30	13	43	41	48	42
ウシクサ属A	Miscanthus type	22	56	77	73	54	28	78	37	30	13	43	41	48	42
ウシクサ属B	Andropogoneae/B type	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
タケモ科	Bambusoideae/Bamboo														
メダガ属	Pooidae sect. Medea	471	421	426	476	230	394	243	162	222	225	147	301	14	353
メダガ属	Phleidostachys sect. Nervosa	747	568	604	783	491	717	692	700	614	568	551	545	7	544
タケモ属	Sasa sect. Miyakozumi	7	35	26	61	47	97	71	81	67	33	45	79	97	102
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozumi	56	28	15	47	55	93	52	59	86	70	57	194	164	14
未分類	Others	131	286	253	408	291	186	228	140	192	145	115	136	131	48
その他イネ科	Others														
夷委毛属	Husk hair origin	15	28	35	7	20	14	21	15	26	13	14	7	7	7
糸状根属	Root-shaped	312	696	709	812	704	545	842	383	643	363	294	402	69	164
未分類	Others	334	618	506	747	670	455	728	575	577	588	409	581	470	516
稻木属	Africaria														
チバ科 (アカシキ属)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis														
その他	Others														
細胞壁蛋白質	Total	2132	2814	2703	3468	2810	2518	3033	2482	2470	2100	1385	2235	1071	1043
4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

おもな分類群の推定生産量 (単位 : kg/m²·cm)

イネ ヨシ属	Oryza sativa/indica/rice	0.24	0.46	0.85	1.11	0.47	0.46	0.46	0.57	0.57	0.81	0.45	0.44	0.45	0.83
ススキ属	Phragmites type	0.90	0.61	0.35	0.18	0.34	0.80	0.25	0.46	0.46	0.57	0.24	0.52	0.09	0.42
メダガ属	Phleidostachys sect. Medea	5.47	4.88	4.97	5.62	2.67	3.52	2.81	1.88	2.57	2.61	1.70	3.49	0.16	4.10
ネダガ属	Phleidostachys sect. Nezusa	3.59	2.73	2.90	3.76	3.31	3.44	3.32	3.26	2.95	2.73	1.69	2.82	0.03	2.61
タケモ属	Sasa sect. Miyakozumi	0.05	0.26	0.21	0.38	0.36	0.72	0.14	0.61	0.50	0.25	0.34	0.59	0.73	0.77
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozumi	0.17	0.08	0.04	0.14	0.17	0.28	0.15	0.18	0.25	0.21	0.17	0.58	0.49	0.04

タケモ科の比率 (%)

メダガ属	Phleidostachys sect. Medea	60	61	57	41	45	40	31	42	45	43	51	11	59
ヨシ属	Phragmites/reed	39	34	36	51	44	48	56	48	47	43	38	2	38
タケモ属	Sasa sect. Miyakozumi	1	3	3	4	5	9	8	10	8	4	9	48	59
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozumi	2	1	0	2	2	4	3	3	4	5	3	39	38

大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、メダケ節型やネザサ節型が卓越していることが分かる。

⑤ S C 8

陥し穴状遺構の埋土上部（試料2）と埋土底部（試料3）について分析を行った。その結果、クマザサ属型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、クマザサ属型やミヤコザサ節型が優勢となっていることが分かる。

⑥ S C 9

堅穴状遺構の床面直上（試料1）について分析を行った。その結果、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が多量に検出され、イネ、ウシクサ族A、ウシクサ族B、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。イネの密度は2,800個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

⑤) 考察

① S E 6・7・8・15

S E 6 の埋土の堆積当時は、遺構周辺はメダケ属（メダケ節やネザサ節）などのタケ亜科が繁茂する状況であったと考えられ、部分的にススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られたと推定される。また、調底下部の堆積当時には、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと考えられ、埋土最上部の時期には調査地点もしくはその近辺で耕作が行われていたと推定される。

これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）が必要である（駿田、1991、近藤、1995）。このことから、当時は何らかの理由で火入れなど人間による植生干渉が行われていたと考えられ、遺跡周辺は日当りの良い比較的開かれた環境であったと推定される。

その他の調査遺構についても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、S E 15の埋土底部の堆

積当時には、周辺にカシ類などの樹木（照葉樹）も分布していたと推定される。

② S C 8（陥し穴状遺構）

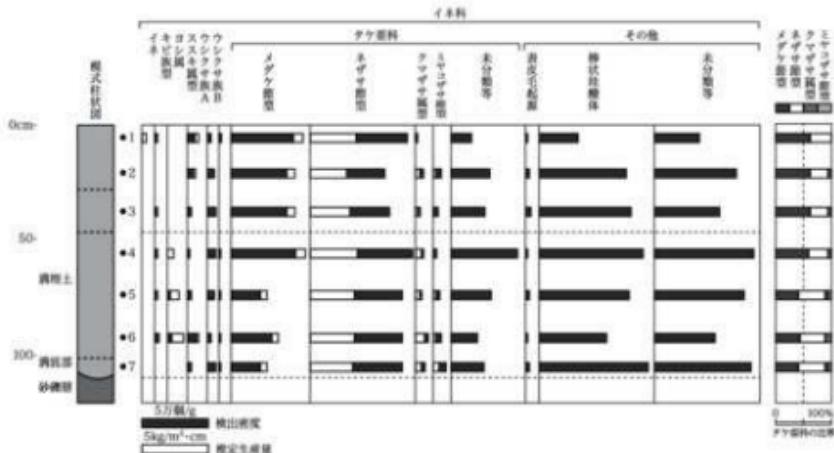
陥し穴状遺構の埋土の堆積当時は、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族、ネザサ節なども生育するイネ科植物であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属（メダケ節やネザサ節）は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地殻規模の氷期一開水期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山、2001）。ここでは、クマザサ属が卓越していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったと推定される。

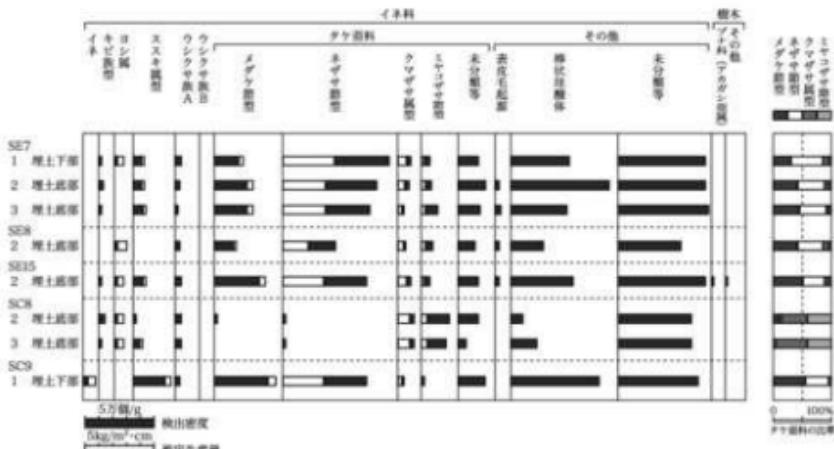
クマザサ属は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高瀬、1992）。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

③ S C 9（堅穴状遺構）

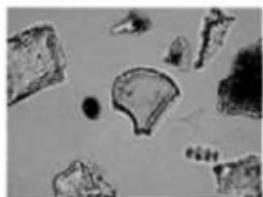
堅穴状遺構の床面直上層の堆積当時は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）及びススキ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、周辺では耕作が行われていたと推定される。住居外の土壤などの比較試料がないことから確定的なことは言えないが、住居の屋根材や敷物などとしてススキ属やイネの茎葉（藁）が利用されていた可能性も考えられる。



第38図 SE6における植物根叢体分析結果



第39図 SE7・8・15, SC8・9における植物根叢体分析結果



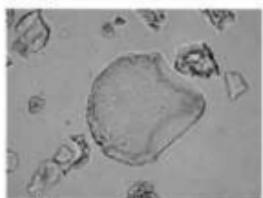
イネ
SC9-1



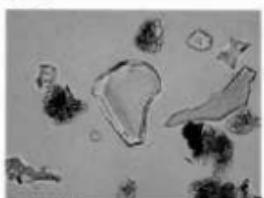
イネ
SC9-1



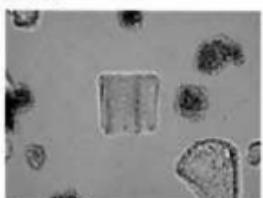
キビ族型
SE15-2



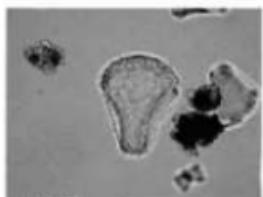
ヨシ属
SE6-5



ススキ属型
SE6-6



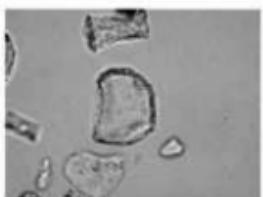
ウシクサ族A
SE6-2



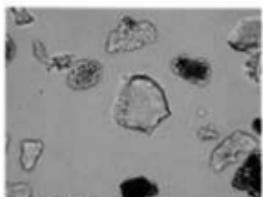
メダケ属型
SE6-1



ネガサ属型
SE6-4



クマザサ属型
SE7-2



ミヤコデサ属型
SE6-5



表皮毛起源
SE7-2



アカガシ属型
SE15-2

植物珪藻体(プランクトンオパール)の顕微鏡写真

— 44 —

— 44 —

5 SE 6・7・8・15における花粉分析

(1) 目的

SE 6・7・8・15については、低湿地ということで堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原と遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定を行うために、花粉分析を実施した。

(2) 試料

分析試料は、SE 6・7・8・15の4地点から採取された計4点である。

(3) 結果

出現した分類群は、樹木花粉8、草本花粉7、シダ植物胞子2形態の計17である。分析結果を第13表に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基準とする花粉ダイアグラム(第40図)を示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

① SE 6

埋土底部では、ヨモギ属、イネ科、キク亜科、タンボボ亜科、シイ属・マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。

② SE 7

埋土底部では、イネ科やヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

③ SE 8

埋土底部では、花粉密度がやや低く、草本花粉が占める割合が極めて高い。草本花粉ではヨモギ属や

イネ科が優占し、キク亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科、タンボボ亜科などが伴われる。樹木花粉はコナラ属コナラ亜属やコナラ属アカガシ亜属が出現している。

④ SE 15

埋土底部では、花粉密度がやや低く、草本花粉が占める割合が極めて高い。草本花粉ではヨモギ属やイネ科が優占し、セリ亜科やキク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリが出現している。

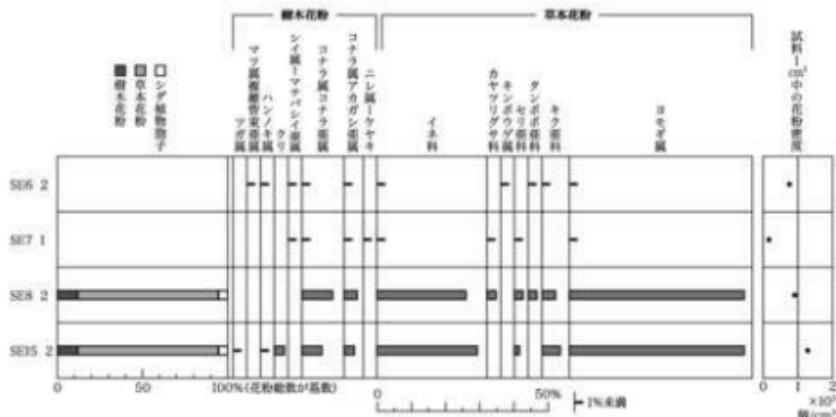
(4) 考察

SE 8及びSE 15の埋土底部の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科を主体としてタンボボ亜科やキク亜科なども生育する比較的乾燥した人里の環境であったと推定される。森林植生としては、周辺地域にナラ林(コナラ属コナラ亜属)やカシ林(コナラ属アカガシ亜属)などが分布していたと考えられ、SE 15の周辺にはクリも生育していたと推定される。

SE 6及びSE 7については、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、SE 8やSE 15とおおむね同様であったと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾燥を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

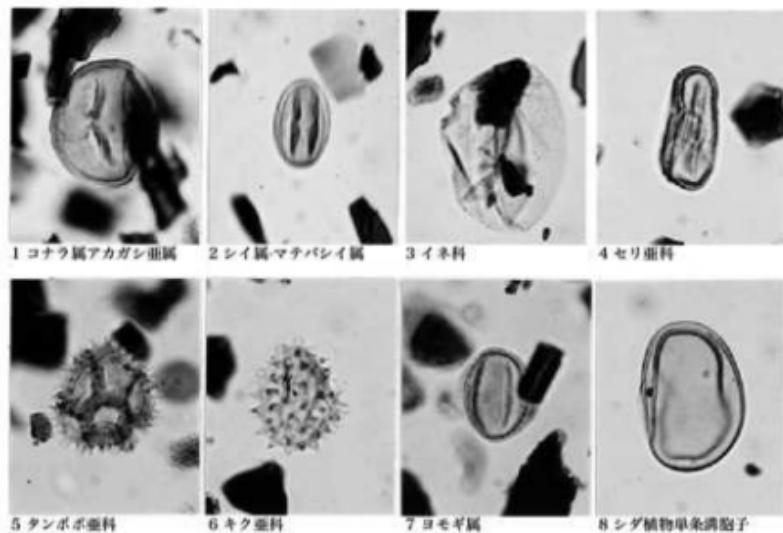
学名	分類群	花粉数			
		SE 6	SE 7	SE 8	SE 15
Arborescent pollen	樹木花粉	80	1	1	1
Tsuga	ツガ属	1	1	1	1
Pinus sylvestris, <i>Diploxylon</i>	マツ属(ツガ・モミ・ヒノキ)	1	1	1	1
Alnus	ハシノキ属	1	1	1	1
Castanea crenata	クヌギ	1	1	1	1
Castanopsis	シイ属・マテバシイ属	5	1	1	1
Quercus siliquastrum, <i>Lepidophloeus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	1	1	1
Quercus siliquastrum, <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	8	1	5	4
Ulmus/Populus serrata	ウルム・ヤマツ・カツラ	1	1	1	1
Gramineae pollen	草本花粉	10	9	33	40
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1	3	3
Rhamnaceae	キンボウケ科	-1	-1	-1	-1
Araliaceae	セリ科	1	1	3	3
Lecythidaceae	タングボ科	10	3	3	3
Asteraceae	キク科	17	5	5	7
Artemisia	アキノキリン	32	8	68	79
Psoralea	シソ科	1	1	1	1
Monodelphidiospore	シソ科(シソ子)	2	4	5	5
Tiliace type spore	シソ科(シソ子)	3	3	3	3
Arborescent pollen	樹木花粉	16	4	16	17
Nonarboreal pollen	草本花粉	76	10	113	110
Total pollen	花粉总数	93	13	129	120
	試料1cm ² 中の花粉数	7.7	1.6	9.8	1.3
	×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ³	
Unknown pollen	不明花粉	1	1	1	1
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	7	9
Polygonum cyathiforme	ヨウスゲ	1-2	1-2	1-2	1-2
	明るい酒瓶形	(-)	(-)	(-)	(-)

第13表 SE 6・7・8・15における花粉分析結果



第40図 SE6・SE7・SE8・SE15における花粉ダイアグラム

唐木戸第2遺跡の花粉・胞子



6 SE 6・7・8・15における珪藻分析

(1) 目的

SE 6・7・8・15について、珪藻化石群集の組成が当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原を行うために、珪藻分析を実施した。

(2) 試料

分析試料は、SE 6・7・8・15の4地点から採取された計8点である。

(3) 結果

出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)5分類群である。計数された珪藻の学名と個数を第14表に示す。

① SE 6

埋土底部(試料1、2)では、珪藻の破片が検出されたが、いずれも微量である。

② SE 7

埋土底部(試料1、2)では *Cymbella amphioxys* や珪藻の破片が検出されたが、いずれも

微量である。

③ SE 8

埋土下部(試料1)では、珪藻が検出されなかつた。埋土底部(試料2)では、*Pinnularia borealis*、*Rhopalodia gibberula*、珪藻の破片が検出されたが、いずれも微量である。

④ SE 15

埋土下部(試料1)では、珪藻が検出されなかつた。埋土底部(試料2)では、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema sp.*、*Pinnularia borealis*、珪藻の破片が検出されたが、いずれも微量である。

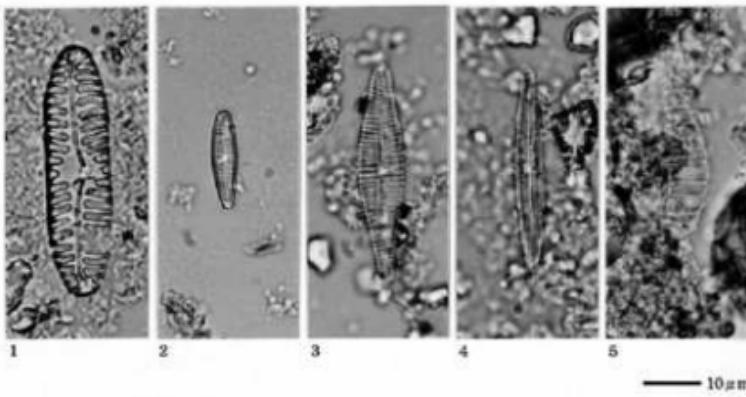
(4) 考察

SE 6・7・8・15の埋土の堆積当時は、珪藻の生育にはあまり適さない比較的乾燥した環境であったと考えられる。遺構内部は通常的に滞水するような環境ではなく、時期や季節によって短期間滞水するような状況であったと推定される。

分類群	SE6		SE7		SE8		SE15	
	1	2	1	2	1	2	1	2
貧塩性種(淡水生種)								
<i>Cymbella amphioxys</i>			1					
<i>Gomphonema gracile</i>							2	
<i>Gomphonema sp.</i>							1	
<i>Pinnularia borealis</i>					1			
<i>Rhopalodia gibberula</i>					1		2	
合計	0	0	1	0	0	2	0	5
未同定	0	0	0	0	0	0	0	0
破片	1	2	6	2	0	14	0	2
試料1cm ³ 中の個数密度	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0	4.0	0.0	2.0
			$\times 10^2$		$\times 10^2$		$\times 10^2$	
完形殻保存率(%)	0.0	0.0	14.3	0.0	0.0	12.5	0.0	71.4

第14表 SC6・7・8・15における珪藻分析結果

熊本戸第2遺跡の珪藻



1. *Pinnularia borealis* 2. *Geophaeomma* sp. 3. *Compsosoma gracile* 4. *Cymbella amphioxys* 5. *Rhabdonodis gibberula*

7 S C 8におけるリン・カルシウム含量分析

(1) 目的

S C 8においては、遺体、排泄物、代謝物、食料残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムの性質を利用して、S C 8における生物遺体（人骨など）の確認を行うためにリン・カルシウム含量分析を実施した。

(2) 試料

分析試料は、S C 8の埋土上部から採取された2点及び比較試料として採取された2点の計4点である。

(3) 分析結果

各元素の定量分析結果(wt%)を第3表に示し、リン酸(P_2O_5)とカルシウム(CaO)の含量を第14図に示す。

(4) 考察

一般に、未耕地の土壤中におけるリン酸含量は0.1~0.5%程度、耕土地壤でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による

影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

S C 8の埋土におけるリン酸含量は、埋土上部(試料2)で0.48%、埋土底部(試料3)で0.39%であり、遺構外(試料1)の0.27%、地山層(試料4)の0.15%と比較して明らかに高い値である。カルシウム含量は、遺構埋土で0.54~0.71%、比較試料で0.55~0.85%であり、両者の間にとくに明瞭な差異は認められなかった。

以上のことから、S C 8（陥入穴状遺構）の内部にはリン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が示唆されるが、埋土上部の方が埋土底部よりもリン酸含量が高いことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。カルシウムについては、土壤中で拡散・移動した可能性が考えられる。

第VI章

まとめ

今回の発掘調査で確認された遺構・遺物は、調査区東側に隣接する唐木戸第1遺跡との関連を含めて検討を加えることで、それぞれの時期において、この地の姿を明らかにする手がかりになると考えられる。そこで発掘調査の成果を踏まえて、本遺跡の性格について考えることをもってまとめとした。

1 繩文時代草創期～早期

縄文時代草創期～早期の遺構としては、縄集中箇所1箇所、土坑2基を検出した。縄集中箇所は、22個の円窓がおよそ4.0m×2.5mの範囲内に散乱していた。周辺で同一層において窓は確認されていない。出土窓の中に赤化窓ではなく、炭化物も検出されていないことから調理施設とは考えにくい。西側のSC7を掘った際に出土した、窓の可能性がある。

土坑は2基ともに陥穴と思われる。形状・性質等が類似しており、長軸方向は等高線に直行し、北西方向を向く。検出状況から見て、MB0からの掘り込みと考えられ、縄創年代は特定できないが形態の特徴・埋土の状況などから時期的な差はほとんどないと考えられる。

本遺跡東側のC区は、西から傾斜した谷部にあたり、川や沢があったと考えられ、実際に調査により溝状遺構が確認されている。この川の水を飲みに来る動物の通路となる「獣道」に沿って、陥穴をつくり、狩猟の場としていたと考えられる。西側の一段高いところに位置する唐木戸第3遺跡でも陥穴が確認されている。また、谷を挟んだ東側の唐木戸第1遺跡では陥穴が10基ほど確認されている。縄文土器等の遺物が確認されていないことから生活の場とは考えにくい。

2 アカホヤ降灰以降の時代

鬼界アカホヤ火山灰降灰以降の遺構として、堅穴住居1軒、掘立柱建物5棟、土坑7基（内堅穴状遺構1基）、溝状遺構17条を検出した。堅穴住居は北側半分を削平された状態で検出された。遺物は検出されて折らず所属時期は特定できない。SB1～5については、遺物が出土していないため、所属時期は特定できないが、SC9の出土遺物（土師器皿）

や自然科学分析の結果と、唐木戸第1遺跡の掘立柱建物の出土遺物が12～13世紀と推定されることから、それに近い時期の所産と考えられる。SC9は遺構配置などから掘立柱建物に伴う遺構と推定される。遺構内から白色粘土塊と焼土が集中する部分が確認され、破碎したと思われる赤化窓が出土した。また、自然科学分析によりイネのプランツオバールが検出された。以上のことにより、SC9はワラ葺きの屋根をもつ遺構。もしくは床にワラを敷いて使用していた遺構の可能性がある。また、何らかの作業場としての役割を持つ遺構であった可能性がある。時期は自然科学分析の結果、床面の炭化物では西暦1200～1270年という年代値が得られたことと出土遺物から中世と推定できる。

SC1は、埋土中に高原スコリア（Kr-Th）を確認できた。このSC1は遺物を伴わず用途は不明で、類似例として高鍋町の北牛牧第5遺跡、新富町の西畦原第2遺跡でも同様の大きさ・形状をもつ土坑が検出されている。埋土にKr-Thを含むこと、時期比定できること、遺物が出土しないこと、他の遺構と共にせず単独で検出されることなども共通している。遺構の性格や用途について今のところ不明である。

SC2～6は遺物を伴わず、わりと浅い土坑である。時期・用途ともに不明で、深さが約25cmと浅いSC2・3・6は樹根と考えられる。SC4・5は、浅めの陥穴の可能性がある。

SE1～17を確認したが、ほとんどが自然流路と考えられる。SE3・16・17は、硬面を底部にもち、水汲みのための路として使われていた可能性が考えられる。SE3は西側から、SE16・17は東側から谷に下りてくる路と思われる。

SE6は、SE8からU字に張り出したような形状をもち、東から西に延びてまた東に戻る。深さが0.15～1.35mでかなり差がある。底部にシルト質の土と磚を含まないことや自然科学分析の結果から、通常的に湛水するような環境でなく、水流が當時あったとも考えにくい。このことにより、人工的に開

削されたものと考えられる。S E 4～8・13～15から弥生土器が出土した。S E 10～13より土師器片・須恵器片・陶磁器片が出土した。

以上のことから、本遺跡のアカホヤ降灰以降の時期では自然流路を生活用水として使用していたと推定される。中世では、L字に配置した掘立柱建物と付属施設の堅穴状遺構をもつ一家族程度がここで生活を営んでいたと考えられる。底部に硬化面をもつS E 3は、この掘立柱建物群から谷部に伸びる道と思われる。弥生土器が出土しているS E 7などの時期では、大雨が降ると流路が増水し、水害等を起こしていたと推定される。本遺跡と隣接する唐木戸第1・3遺跡では、弥生時代の堅穴住居は検出されていないが、北約2kmにある牛牧原遺跡で堅穴住居が7軒検出されていることから、周辺の小高い場所で生活していたと思われる。しかし、自然科学分析の結果を見ると、溝状遺構内部は通常的に漏水するような環境ではなく、時期や季節によって短期間漏水するような状況であったとある。即ち、梅雨時期や台風の多い夏を中心とした時期のみの漏水であったと考えられ、生活用水として當時使用していたとは考えにくい。

【引用・参考文献】

「高鍋町史」

高鍋町史編纂委員会 1987

「高鍋藩史話」

安田尚義 1968

「日向国史 上」

吉田直古 1929

「土地分類基本調査 奈・高鍋」

国土調査・県農政水産部農業振興課 1982

「高鍋町遺跡詳細分布調査報告書」

高鍋町教育委員会 1989

「特に中近遺跡発掘調査概要報告書」

高鍋町教育委員会 1982

「新道南遺跡発掘調査報告書」

高鍋町教育委員会 1986

高鍋町文化財調査報告書 第5集

「大口ノ口第2遺跡」

高鍋町教育委員会 1991

高鍋町文化財調査報告書 第7集

「中尾・牛牧地区遺跡」

高鍋町教育委員会 1995

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

第80集

「北牛牧第5遺跡・御座第3A遺跡」

宮崎県埋蔵文化財センター 2003



遺跡遺量（東より）



調査B・C区全量



圖立柱建物群



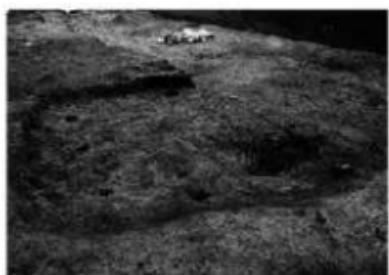
SC7・8



SB1



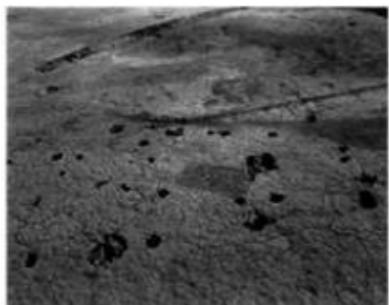
SC8



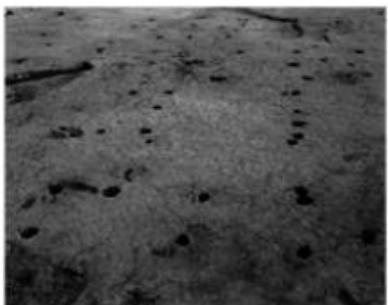
SA1



SB1



SB2



SB3・4



SC9



SC1



SE5・4 (南より)



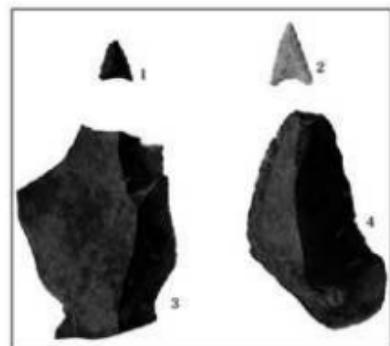
SE7 (南より)



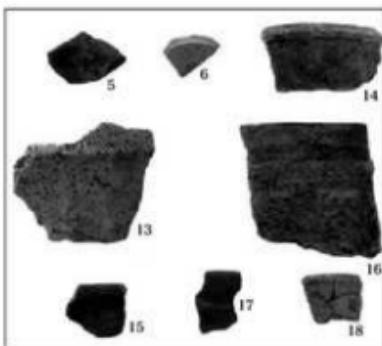
SE14・15 (北より)



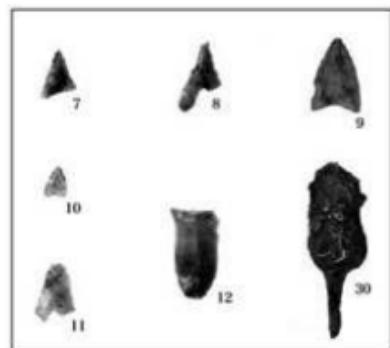
SE6 土刷断面 (北より)



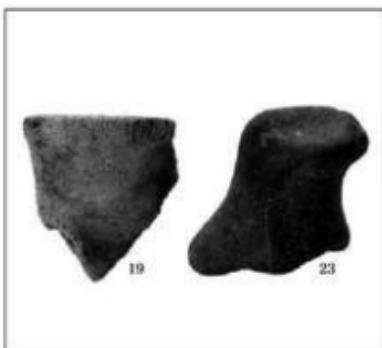
縄文時代草創期～早期出土石器



土坑・溝状遺構出土上土器



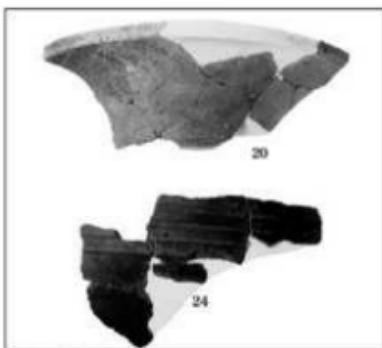
溝状遺構出土石器・鉄繩



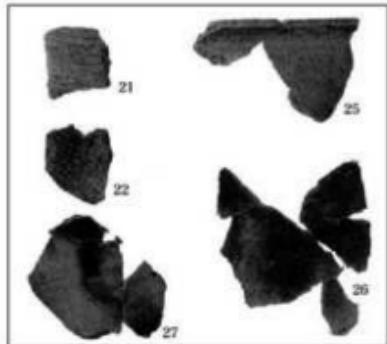
溝状遺構出土上土器



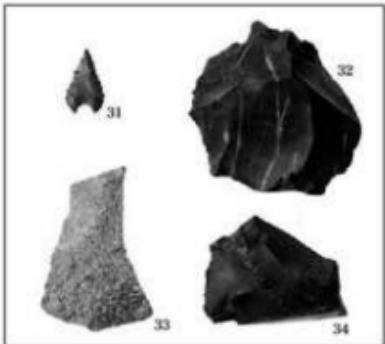
溝状遺構出土上土器



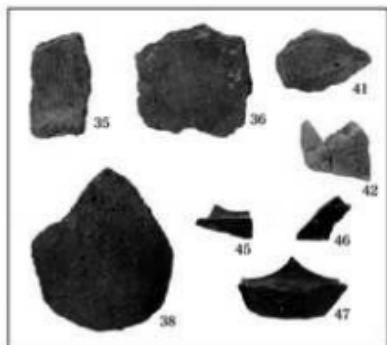
溝状遺構出土上土器



溝狀道構出土土器



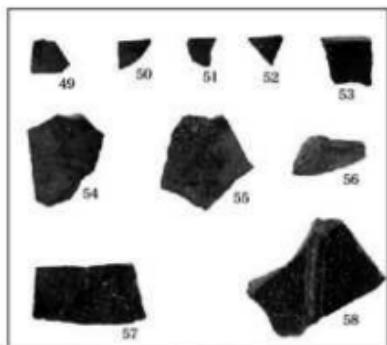
道構外出土石器



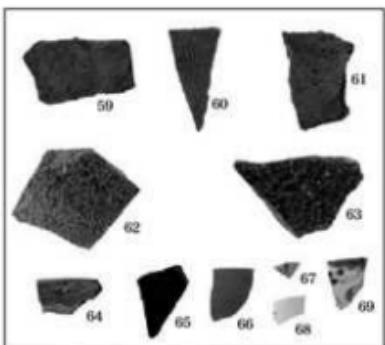
道構外出土土器



道構外出土土器



アカホヤ降灰以降出土土器・陶磁器



アカホヤ降灰以降出土土器・陶磁器

報告書抄録

ふりがな	からきどだいせいき					
書名	唐木戸第2遺跡					
調査名	東九州自動車道（都農～西都原）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	9					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第100集					
執筆調査担当名	吉富 俊文 金丸 研路					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県都佐上原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171					
発行年月日	2005年2月10日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
唐木戸第2 遺跡	宮崎県児湯郡 高鍋町 大字上江字 北唐木戸	32度7分59秒	131度28分19秒	2002.9.2 ～ 2003.3.7	4,200m ²	東九州自動車道（都農～西都原）建設に伴う発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
唐木戸第2 遺跡	集落跡	縄文時代 草創期～早期 アカホヤ降灰以降 の時代	土坑（辺溝・穴状遺構） 2基 竪穴住居 1軒 掘立柱建物 5棟 土坑 7基 溝状遺構 17条	石器、剥片 骨生土器 土師器・須恵器 鉄器 陶磁器、銅貨		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第100集

唐木戸第2遺跡

東九州自動車道（郡農～西都間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書9

2005年2月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 藤屋写真印刷株式会社

〒883-0045 宮崎県日向市本町7-15

TEL 0982(52)7171 FAX 0982(56)1208
